

ミュージアムにおけるクリエイティブ思考

日本語版

CREATIVELY MINDED AT THE MUSEUM

心の健康に寄与するクリエイティブなミュージアム活動

Creative and mental health activity in museums

デイビッド・カトラー 著 By David Cutler



ミュージアムにおける創造的思考 心の健康に寄与する創造的なミュージアム活動

ベアリング財団とは

ベアリング財団は、人権の保護・推進および包摂的な社会の促進に取り組む英国にある民間の助成団体です。私たちは国内外を問わず、成熟した市民社会が果たすべき役割があると考えます。市民社会が差別や不利な立場に直面している人々と共に活動し、不公平や不平等の根本的な解決に戦略的に取り組めるよう、当財団の資源を活用して様々な社会活動を支援しています。詳しくは『50の助成金からひととくベアリング財団の歴史』をご覧ください。2020年以降は、心の不調を抱える人々に創造的な活動の場を提供するアート・プログラムに重点的に取り組んでいます。

博物館協会 (ミュージアム・アソシエーション) とは

英国の博物館協会 (Museums Association/MA/ミュージアム・アソシエーション) は、英国のミュージアムとミュージアムで働く人々を代表し支援する会員制の組織です。ミュージアムの館長から研修生までさまざまな1万人の個人会員がおり、また、ボランティアが運営する小規模な地域ミュージアムから大規模な国立の施設に至るまで、1,500館もの団体の会員を代表する組織です。1889年に世界初のミュージアム専門の協会として設立されました。「Empowering Collections (人々を力づけるコレクション)」や「Museums Change Lives (ミュージアムは人生に変化をもたらす)」などの取り組みを通して、英国のミュージアム業界をリードしています。また、ミュージアムと地域社会との連携のために、エス・フェアベン・コレクション基金などの助成金を通じて年間140万ポンドの資金提供を行っています。詳しくはWebサイトをご覧ください。

www.museumsassociation.org

著者紹介

デイビッド・カトラーは、ベアリング財団の代表として芸術プログラムを統括しています。著書に『クリエイティブ思考』や『クリエイティブ思考とNHS』など、当該テーマの報告書数冊があります。

謝辞

本報告書に寄稿した下記の皆様に謝意を表します。

ステラ・マン(グレンサイド病院博物館)、ジェーン・ストックデル、サリー=アン・エバンス、フィル・ウォルターズ(メンタルヘルス博物館)、コリン・ゲイル(ベスレム・マインド博物館)、ジェンマ・チャニング(ビーニー美術館・図書館)、ジェーン・フィンドレー、ケリー・ロビンソン、アレックス・ボウイ(ダリッジ・ピクチャー・ギャラリー)、ジョー・ファーバー(ディラン・トマス・センター/スウォンジー市議会)、ルーシー・アンダーソン、大英帝国五等勲爵士カロ・ハウエル(ファウンドリング博物館)、クリア・コイア(グラスゴー博物館)、ルイズ・キャンピオン、クリス・スティーブンス(ホルバーン美術館)、エスター・アミス=ヒューズ(リーズ美術館・博物館)、ヘザー・トーマス(ザ・ライトボックス)、シオバーン・マッコナッキー(スコットランド国立美術館)、エイミー・ハメット(ソールズベリー博物館)、エマ・ガスコイン(ウェル・シティ・ソールズベリー)、クリア・ドブソン、エスター・コリンズ(タウナー・イーストボーン・ギャラリー)、クララ・シールド(タイン・アンド・ウエア地域アーカイブ博物館)、ルーサンヌ・バクスター(エディンバラ大学)、ドリー・セン

博物館協会の政策担当官アリスティア・ブラウンが本報告書の草案に対する助言を行い、編集はベアリング財団のコミュニケーション・研究担当官ハリエット・ロウ、デザインはアレックス・ヴァリが担当しました。

デイビッド・カトラー 著
『ミュージアムにおけるクリエイティブ思考
心の健康に寄与するクリエイティブなミュージアム活動』
〈日本語版の発行によせて〉

この冊子は英国を拠点とするベアリング財団が2022年11月に発行した『ミュージアムにおけるクリエイティブ思考:心の健康に寄与するクリエイティブなミュージアム活動』を、国立アトリサーチセンターが翻訳監修し、日本語版として編集・レイアウトを行ったものです。「国立アトリサーチセンター共創フォーラムVol.1 Arts, Health & Wellbeing ミュージアムで幸せになる。」(2023年10月8日)の開催に際して、ベアリング財団と著者のデイビッド・カトラー氏の許諾を得て制作しました。元となっている報告書はウェブサイトからPDFファイルで閲覧することが可能です。

<https://baringfoundation.org.uk/resource/creatively-minded-at-the-museum/>

(2023.8.28閲覧)

ベアリング財団はミュージアム分野の活動を資金的にサポートするだけでなく、その活動を社会に広く知らせる報告書の発行を継続的に行っており、社会包摂に関わるアートやミュージアム分野の重要な資料となっています。この日本語版を発行しウェブサイトで公開することで、日本のミュージアムの関係者や、医療・福祉関係者、研究者、政策立案者などがこの分野に関心をもち、日本国内での議論や活動の発展につながることを願っています。

独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター

2023年10月8日



独立行政法人国立美術館

国立アトリサーチセンター

National Center for Art Research

目次

序文 ドリー・セン	04
要旨	07
はじめに	08
事例研究: メンタルヘルス専門のミュージアム	15
グレンサイド病院博物館(ブリストル)	16
メンタルヘルス博物館(ウェイクフィールド)	20
ベスレム・マインド博物館(ロンドン)	23
事例研究: さまざまなミュージアム	25
ビーニー美術館・図書館(カンタベリー)	26
ダリッジ・ピクチャー・ギャラリー(ロンドン)	29
デラン・トマス・センター	32
ファウンドリング博物館(ロンドン)	35
グラスゴー・ミュージアムズ	38
ホルバーン美術館(バース)	41
リーズ美術館・博物館	44
ザ・ライトボックス(ウォキング)	46
スコットランド国立美術館	48
ソールズベリー博物館	51
タウナー・イーストボーン・ギャラリー	54
タイン・アンド・ウィア州アーカイブ博物館	58
エディンバラ大学	61
所論	64
結論: 発展の余地	68
提言	69
あとがき クリス・スティーブンス(ホルバーン美術館館長)	70
ベアリング財団出版物	72

序文

ドリー・セン 著

子供の頃、ミュージアムが大好きでした。学校の遠足でホーニマン博物館をはじめとする地元のミュージアムに行き、すっかり魅了されたのです。そうした感動を機に世界が広がりました。ところが14歳の時に精神疾患を発症し、それ以降、孤立感と精神的な苦痛にもがくうちに10年の月日が過ぎ去りました。世界は閉ざされてしまったのです。

私は元来、好奇心旺盛で、精神的にどん底だった時期でもその性格は変わりませんでした。なにかに興味を引かれると好奇心が原動力となって険しい道のりへと足を踏み出すことができるのです。けれども、つらかった時期にはミュージアムに出かけるまでの意欲は起きませんでした。自信を失っていたので、自分にはとてもできない行動のように感じていたのです。大人になってからもミュージアムに対して、一般庶民や普通の社会から閉め出された人間には縁のない場所、気取った人々が血の通っていない物を展示する場所、というありふれたイメージを持っていました。

やがて30代になると症状が改善し、働けるようになりました。その頃の数年間、仕事の打ち合わせでユーストン周辺に来る機会が何度かありました。近隣にはウェルカム・コレクションのミュージアムがあり、入館無料ということも知っていましたが足を踏み入れることはできませんでした。立派な建物で、警備員が来館者の所持品をチェックする様子が見えましたが、来館者は中流階級の白人ばかりで、私のような人間が行く場所ではないと感じたのです。ところがある日、さまざまな人種の人々が団体で入っていくのを目にし、私も行ってみようと勇気がわきました。それ以降、徐々に他のミュージアムにも足を運ぶようになりました。

医学系の博物館では、メンタルヘルス関連の展示物に関心を持って見ようと何度も思い、特段意味を見いだすことも心を動かされることもなく、それが自分につながる文化遺産で、自分につながる歴史なのだとう一方的に告げられたように感じました。その後私は、より批評的に思考する術を身につけ、ミュージアム・コレクションの一部には、歴史的な意味での不平等や、現代の不平等の社会構造を無批判に反映し、結果として特定の人々をおとしめてしまっている展示があることに気がつきました。そうした人々は自ら語る機会を与えられないまま、小さく無力な存在とみなされてきたのです。

私の死後に私の人生にレッテルを貼って勝手に解釈するのではなく、生きている私に会いに来て、私や私のような人々のことを知って欲しいのです。互いに歩み寄りたいのです。「触るな」という注意書きを貼るのをやめて、美の本質や人間性、そしてお互いを結びつけるものを手に入れたいのです。かつて精神病院で人々が流した涙は今や乾ききり、彼らの物語はそこにはもう残っていません。今日涙する人がいれば、その人の話に耳を傾ける必要があります。

私の作品は、いくつかのミュージアムで展示されました。そのひとつ、ケント州カンタベリーのビーニー美術館・図書館(p.24参照)は、地域のメンタルヘルス関連事業と良い協力関係を築いています。私が参加した展覧会「A Place of Safety(安全な場所)」に、ある時地元の精神科病棟の入院患者が訪れました。その様子について、キュレーターのジェンマ・チャニングから次のようなメールが届きました。「患者のひとりがあなたの映像作品《インサイド》(複数の声を聞く主観的な体験がテーマ)から流れる複数の声を聞いてとても気に入って、これは自分が感じているのと同じだと言うので、スタッフ全員で座って鑑賞しました」。他者の思考のありように関心がわき、そして心と心がつながったのです。

私は障がい者芸術に資金提供を行う慈善団体アンリミテッドに申請し、芸術プロジェクト「Birdsong from Inobservable Worlds(観察不可能な世界からの鳥のさえずり)」としてウェルカム・コレクションのアーカイブを調査し、精神障がい当事者の声を掘り上げることを試みました。精神医療のサバイバーが書き残したものはこのアーカイブの10%に過ぎず、当事者が自らの歴史においても周縁化されてきたことがわかっていました。私は幸運にも、このプロジェクトに対する助成金を得ることができました。

ウェルカム・コレクションは現在、非常に複雑な課題に直面しています。自らの植民地支配や組織的に行われた人種差別、そして障がいを持たないものを優先してきた歴史に向き合い、状況を是正しようとしているのです。残念なことです。私自身、障がい者以外の人たちが優先される傾向をそこで目のあたりにしたことがあります。私は非常に前

向きに、ウェルカム・トラストのスタッフとの、込み入った話し合いに臨みました。対話を通して、スタッフが従わなければならない制限について私も学ぶことができました。議題のひとつは、アーカイブにおける時代遅れで礼儀を欠いた言葉遣いが、いかに障がい者の自己表現やアイデンティティに悪影響を及ぼしているかということでした。とはいえミュージアムや図書館は国際的な目録作成制度に従う必要があり、これは各組織の裁量を超えた問題でもあるため、組織自体の価値観とは矛盾した言葉を使うことがしばしば起こるのです。

障がい者差別は確かに存在しており、私は、アーカイブの調査中、病床の冷たさを想起させる資料室で居心地の悪さを強く感じました。そこには私と見た目が似ている人はおらず、抑圧的な沈黙のなかで何をすることも恐怖を感じたのです。そこで私は多様な人々の姿を写したポスターを壁に貼り、さまざまなコミュニティ出身の職員を採用することを提案し、受け入れてもらいました。私たちは自分の姿が反映され、受け入れられていることを実感する必要があります。しかしたったひとりでこうした現状に立ち向かうのは困難です。

ベアリング財団による本報告書にはミュージアムが心の不調を抱える人々と行っている取り組みが紹介されており、非常に嬉しく思います。私はもうひとりではないと感じるのです。ミュージアムが心の不調を抱える人々との活動に情熱を注ぎ、精神疾患の発症率上昇を引き起こしている社会的不平等に取り組む様子には勇気づけられます。社会階層の打破に関する取り組みも行われています。例えば、メンタルヘルス博物館は新型コロナウイルスのパンデミック中、フードバンクに工作キットを寄付しました。一方、ファウンドリング博物館はケアリーバー（児童養護施設や里親のもとで育ったのち自立した若者）向けに有給のミュージアム研修プログラムを提供しました。こうした雇用モデルの対象に心の不調を抱える人々を含めることはもちろん可能です。「Curating for Change (変化のための展覧会作り)」という素晴らしい取り組みでは、聴覚障がい者、身体障がい者、および神経の発達や機能に関連した多様な特性を持つ人々に対し、ミュージアムにおける指導的役割やキャリアパスを提供しています。ただしこうした活動は広く普及しておらず、この点については今後議論が求められます。話し合われるべき課題は多く、私はベアリング財団が対話を始めるきっかけを作ってくれたことに感謝しています。

心の不調を抱える人々とのプロジェクトを行っている上述のさまざまなミュージアムは、それぞれ異なる発展段階にあります。この領域が、いまだ発展途上であることは広く知られています。こうした取り組みが適切な方向へと進展

し、権力の不均衡という歴史あるミュージアムの多くが抱える苦難の道を進まないよう願っています。また、各組織が支援と育成の違いを理解し、権力や影響力が彼らにはあり、心の不調を抱える人々にはないことを認識するよう望みます。そしてメンタルヘルスの問題が医学的見地からだけでなく、政治的にもより詳細に検証されることを願っています。私には、何年分ものミュージアム・プログラムを心の健康に関する未開拓のテーマで企画することができますし、私と同じく心の不調を経験した多くの人にもできるでしょう。誰が私たちの話に耳を傾けてくれるのでしょうか。私は、心の不調を経験したことのある人がミュージアムでメンタルヘルスの展示を行うキュレーターの職に就くことを強く望んでいます。そんなことは夢のまた夢なのでしょうか？ 誇大妄想と言われるのでしょうか？

“私には、何年分ものミュージアム・プログラムを心の健康に関する未開拓のテーマで企画することができますし、私と同じく心の不調を経験した多くの人にもできるでしょう”

といっても、素晴らしい事例がないわけではありません。この報告書では優れた取り組みを数多く紹介しており、読者の皆さんが私と同じように勇気づけられ、感銘を受けることを願っています。ミュージアムは権力を握り、ごみを溜め込むだけの存在ではありません。生命そのものとなり得るのです。この報告書は命を育む温室であり、ここから美しい若葉が芽吹くでしょう。

W.H.オーデンの詩「オブジェ」では、ミュージアムの展示品が悲しみや驚きの感情を持つ存在として描かれています。どんな人でも、芸術作品を見ると自分独自の解釈を持ちます。精神的苦痛を受けたことがある人々は悲しみや驚きといった感情に関する知識が豊かで、聞き手を思わずひざまづかせるような体験談を話す人もいます。ミュージアムはできるだけ多くの物語に耳を傾ける必要があります。展示品に端を発する語りは、その展示品に命を与えるだけでなく、地域社会に文化や文化遺産をもたらし、ひいては癒しをも与えるきっかけとなるかもしれません。私たちは、自分が抱える物語を傷ついた心の奥にしまっておきたいとは思いません。話して解放したいのです。そうした可能性の扉を開いてくれたベアリング財団に改めて感謝を送ります。

ドリー・センは、ロンドン生まれのライター、映像作家、アーティスト、パフォーマー、活動家。身体障がい者で、労働者階級出身のクィア（性的マイノリティ）。「健常者の世界」の側から押し付けられる「障害者」や「狂気」に関心を持っている。現在、グレート・ヤーマス在住。ジェンダー代名詞は、She/They。

www.dollysen.com



バーリニー刑務所の人々が監修した初のハンズオン体験キット「Art Outside of the Box (創造的な思考でアート)」を使って、グラスゴー全域に常設展示「Art Extraordinary (超アート)」を紹介する。

© CSG CIC Glasgow Museums Collection

要 旨

この報告書では、特に心の不調を抱える人々に対し、参加型の芸術を通して関わりをつくるミュージアムの取り組みに注目します。より広い視点からミュージアム、健康、ウェルビーイングを取り上げた重要な報告書は数多くあるものの、心の不調を抱える人々との取り組みに焦点を絞った報告書は他にありません。

序文では、目的と言葉の定義について説明するとともに、この取り組みに関するさまざまな背景やその規模を説明し、続いてスタッフの支援、安全防護対策、平等性、多様性、包摂性、メンタルヘルスに対する偏見や差別への挑戦といった重要な基本指針を紹介します。

本報告書の軸は、16の団体からの事例研究です。そのうち3館は精神医学に基づく「専門博物館」で、そのほかは国立の美術館や各地域の総合博物館といった「さまざまなミュージアム」です。

掲載している事例研究は全体のごく一部ですが、報告書の最後では、そこから汎用性のある教訓を導き出したいと思えます。どんなタイプのミュージアムであっても、こうした取り組みに着手することは可能です。成功の鍵は、地域のメンタルヘルスに関わる慈善団体やNHS(National Health Service/日本の国民健康保険制度にあたる)とよい形で関係を築くことにあります。週に一度の勉強会から有給の研修まで、参加者を巻き込むためのさまざまな手段があります。しかし、その運営は多くの場合、専任の職員ではなく他の業務も抱えるラーニングやエンゲージメントの担当者が兼任しています。また通常はミュージアムもしくは地域の会場で実施され、病院では減多に行われません。つまり全般的に見て心の健康に焦点を絞った取り組みは、ミュージアムの活動のなかで比較的發展途上の段階にあるといえるのです。

包摂的なミュージアムの実現には、「ファミリー・フレンドリー(家族連れに優しい)」や「エイジ・フレンドリー(高齢者に優しい)」といった配慮と同様に、メンタルヘルスへの配慮も求められています。心の不調を抱える人々を対象とした取り組みも実施すべきなのです。

提言

- 1、ミュージアムに関心のある団体や社会基盤となる組織は、メンタルヘルスがいまだ発展途上の重要な領域であることを明確に認識する必要があります。
- 2、この領域における取り組みを進展させていくうえで非常に重要なのは、スタッフと地域住民の両者において、心の不調を抱える当事者の実体験やリーダーシップを尊重することです。
- 3、ミュージアムは、地域のNHSやマインド(Mind/イングランドとウェールズにおいて活動するメンタルヘルス関連の慈善団体)などの非営利団体に積極的に働きかけ、協働の可能性を探るべきです。対象者を絞った支援について議論することも必要です。
- 4、少なくとも5月のメンタルヘルス啓発週間と10月10日の世界メンタルヘルスデーには、ミュージアムは関連する活動や展示を確実に実施できるよう準備すべきです。
- 5、特にラーニングとエンゲージメントの担当職員を対象とした「メンタルヘルス・ファーストエイド・トレーニング(メンタルヘルス応急処置訓練)」や「トラウマ・インフォームド・プラクティス(心的外傷に関する実践)」などの研修の実施を、ミュージアムは検討すべきです。
- 6、ホルバーン美術館(バース)が実施しているようなメンタルヘルス領域に関する展示型イベントを増やし、良質な取り組みを共有して認知度を上げるべきです。オンライン指導ツールの拡充も必要です。
- 7、ニューヨーク近代美術館(MoMA)が認知症患者を対象に行っている取り組みのように、ミュージアムはこの領域の発展をリードしていくべきです。
- 8、ミュージアムへの資金提供者は、資金がメンタルヘルス分野に使われているかを明確に把握するか、もしくはこの分野に用途を絞った資金提供を行うべきです。可能な限り長期的な資金提供が求められます。

はじめに

この章ではさまざまな事例研究に関連する背景を説明します。まず本報告書の目的と編集方法を述べ、続いてこの領域に関する簡単な歴史、関連研究、活動面の全般的な進展状況などを紹介し、その後、スタッフのメンタルヘルス支援や安全防護対策、注意義務平等性、多様性、包摂性といった道徳的配慮を含む基本原則を考察します。

本報告書作成の背景

ペアリング財団と博物館協会は「ミュージアムは心の不調を抱える人々を含む社会のあらゆる層に学習や創造の機会を提供すべきである」という考えを共有し、協力関係を築いています。ペアリング財団は2020年以降、芸術関連の資金提供をこの領域に絞って行っており、博物館協会による啓蒙活動「Museums Change Lives (ミュージアムは人生に変化をもたらす)」はその代表的な取り組みです。

健康とウェルビーイングに寄与するミュージアムの可能性は広く認知されてきたものの、心の不調を抱える人々との取り組みに関する具体的な報告についてはこれまで見過ごされてきました。そこで私たちは、その欠落を埋める必要性を感じたのです。本書はペアリング財団が発行してきた複数の報告書の姉妹版にあたります。そのひとつ『クリエイティブ思考と文化』(レストレーション・トラスト著)¹では同じ手法を文化遺産の領域に適用していますが、アーカイブには言及しているものの、ミュージアムについてはあまり触れていません。

本報告書が対象とする読者

この報告書に対して、ミュージアムの館長、ラーニングやエンゲージメントの部門のスタッフ、また資金提供者などから高い関心が寄せられるよう願っています。また、心の不調を抱える人々や、そういった人々を支援する慈善団体やNHSなどの組織からの注目にも期待しています。

用語の定義

メンタルヘルスの問題

メンタルヘルスは、どのような言葉が使われているのかも含め、非常に議論が活発な領域です。本報告書では、マインドやNHSなどの組織が広く使用している「mental health problem (メンタルヘルスの問題、心の不調)」という表現を使っていますが、場合により「mental distress (精神的苦痛)」など、他のさまざまな表現が好まれることも認識しています。メンタルヘルス(心の健康)がすべての人に関わるテーマだということは確かですが、この報告書が対象としているのは、あらゆる人の心の健康に関する予防的な取り組み、健康、マインドフルネスといった身近な課題ではなく、その枠外にある問題です。身近な課題も疑うべくもなく重要なテーマであり、すでに多くの研究が行われていますが、ペアリング財団の取り組みでは焦点を当てていないのです。

メンタルヘルスの問題を定義するとしたら、一冊の本が書けるほどの大きな論題になりますが、現在の傾向としては、双極スペクトラム障がいをはじめとする精神病(人口の約3%)と、より広範に発症する不安やうつなどの一般的な精神障がいに大別されるでしょう。また、薬物中毒、アルコール中毒、摂食障がい、明確な診断ができないパーソナリティ障がいもメンタルヘルスの問題に含まれます。

ミュージアム

この報告書におけるミュージアムの定義は、所蔵品の保存や研究、展示を行う公共機関です。一般的には、総合、自然史・自然科学、科学技術、美術、歴史の5つのジャンルに分類されます。とはいえ、ミュージアムの定義に含まれるものは絶え間なく変化し、問い直され続けています。

1 『クリエイティブ思考と文化遺産』レストレーション・トラスト著 2021年

モノ

ミュージアムはモノの収集保管を行っています。健康の分野、とりわけ精神医学の文脈において、モノには特別な歴史があります。

興味深いことに、時代をさかのぼると、フローレンス・ナイチンゲールは魅力的なモノが健康回復の過程で大きな価値を持つと強く信じていました。この考えは1859年の彼女の著作『看護覚え書』²にも記されています。

それから長い年月を経た1950年代に、クレア&ドナルド・ウィニコット夫妻が児童心理学の主流となる言説を展開しました。毛布やぬいぐるみなど、幼児に快適さと安心感を与え、母親からの身体的な分離の不安を和らげる「移行対象」³の概念もそのひとつです。

モノに触れるハンズオン体験は通常、創造的なワークショップなど、地域社会と連携したミュージアム活動の一環として行われます。本書では、ビーニー美術館・図書館(カンタベリー)とグレンサイド病院博物館(プリストル)における所蔵品の貸し出しやハンズオン体験などの事例研究を紹介しています。モノに触れることには癒やしや深いつながりを感じさせる効果があり、大きな意味があると論じられています。このテーマについては、ヘレン・チャタージー教授を中心に広範な研究⁴が行われてきました。

参加型芸術

参加型芸術は「コミュニティ・アート」とも呼ばれ、ベアリング財団が資金提供を行う主要な領域です。その内容は通常、プロのアーティストが専門の美術教育を受けたことのない人々に技術を教えるというものです。多くの場合、共同制作として行われます。本報告書は資格を持つ創造的芸術療法士のミュージアムにおける活動は取り上げませんが、米国の研究論文には掲載されています⁵。

方法論

この報告書はベアリング財団の他の報告書と同様、各機関からの自己報告による限られた数の事例研究を軸に、対話や訪問の積み重ねによる調査と、文献調査を組み合わせで作成されたものです。「独自の調査は行わない」という方針は、博物館職員にかかる負担や、低調な解答率に起因する分析の困難が懸念されたためにとられたものです。従って本書は系統的な、或いは網羅的な報告書ではなく、本書における推論はいずれも仮説に過ぎません。

取り上げたミュージアムは、現在もしくは近年に、本報告書にふさわしい活動を行っているかと判断できた館のみです。事例研究の選定は著者たちが行い、専門ミュージアムから総合ミュージアムまで英国各地の多様なミュージアムを紹介しています。地方自治体管轄、大学付属、独立系など運営形態もさまざまです。独立評価機関による検証も事例研究の一環として取り上げました。

背景理解

歴史

メンタルヘルスの歴史には、相互に関連する3つの側面があります。第1に、メンタルヘルスに対する社会の受け止め方が数世紀をかけて変化してきたことです。それによって、喜ばしいことに近年では認知度が高まり、公的な議論が増えてきました。第2に、そうした変化にともない、メンタルヘルスの病院を含む精神医学が進化してきたことです。そして第3に、この背景理解において最も重要なことですが、ミュージアムや博物館学が、従来通りキュレーションや学術研究を重視しながらも、より民主的で包摂的であること、また人権に基づいた手法を希めるようになってきたことです。この点に関する博物館協会の歩みを振り返ると、1990年代後半の報告書『包摂的なミュージアムに関する事例集』⁶にまで遡ることができます。また、同協会の「ラーニングとエンゲージメントに関するマニフェスト」⁷には、こうした手法の拠り所となる指針が記載されています。

2 『看護覚え書』の詳細: en.wikipedia.org/wiki/Notes_on_Nursing

3 クレア&ドナルド・ウィニコット夫妻の詳細: en.wikipedia.org/wiki/Donald_Winnicott

4 『ミュージアムにおけるハンズオン体験 体験型展示の方針と実践』ヘレン・チャタージー教授編 ルートレッジ 2008年

5 E・イオアンニデス著(2016年)「治療環境としてのミュージアムと、芸術療法におけるその貢献」ミュージアム・インターナショナル誌 68.98-109.10.1111/muse.12125

6 「多様性の尊重 包摂的な博物館の事例」博物館協会 2016年

入手先: archive-media.museumsassociation.org/27072016-diversity-report.pdf

7 「ミュージアムにおけるラーニングとエンゲージメントに関するマニフェスト」博物館協会

入手先: www.museumsassociation.org/campaigns/learning-and-engagement/manifesto/#

プリンツホルン・コレクション

ハンス・プリンツホルン(1886-1933)は、1919年にハイデルベルク大学精神医学部で働き始めた時にはすでに、医師でありながら美術史の博士号を持ち、熟練した歌手でもあり、さらには第一次世界大戦の戦闘を経験していました。精神医学部の上司であったヴィルマンス博士はその頃、精神疾患患者が作った芸術作品を少しずつ集め始めていました。作品を作った患者の治療に役立つような気づきがあるかもしれないと考えたのが、収集のきっかけでした。彼は患者による創作物について調査するため、情熱ある仕事仲間であったプリンツホルン博士に声をかけ、いくつもの病院に手紙を送りました。こうして、研究のためのコレクションが迅速かつ大幅に拡充したのです。

そうしたなか、非常に興味深い変化が起きました。プリンツホルンは、日記の一部やスケッチ、彫刻など収集した創作物を医学的な見地からではなく、本質的な芸術的価値において評価すべきだという持論に達したのです。そして1922年に画期的な書籍『精神病者の芸術性』を出版しました。この本はサルバドール・ダリ、パウル・クレー、アンドレ・ブルトン、マックス・エルンストなど当時の重要なアーティストや作家に影響を与え、「シュルレアリストのバイブル」と呼ばれています。チャーリー・イングリッシュは、「その結果、1920年代から1930年代にかけての目がくらむような数年間、精神病からインスピレーションを得た芸術がアヴァンギャルドの最前線に立った」⁸と述べています。これにより「アール・ブリュット」という、より広いテーマへの関心が高まりました。1940年代にジャン・デュビュッフェが中心となって、専門的な美術教育を受けて

いないアーティストの代名詞として「アール・ブリュット」という言葉を広めたのです。その後、1970年代には「アウトサイダー・アート」という言葉が生まれました。

この時点ですでに驚くべき展開だったわけですが、その後、状況は悲惨な方向へと進むこととなります。1937年にナチスが悪名高い展覧会「退廃芸術展」を開催し、ドイツ全土を巡回した際、プリンツホルンらのコレクションからも複数の作品が出品されました。ナチスによるプロパガンダの意図は明らかで、現代的で非ナチス的な芸術作品を精神疾患の表われとみなすというものでした。さらに恐ろしいことに、1939年、ナチス政権は当時の呼称でいう「精神分裂病」や知的障がいを含むさまざまな症状の患者を医療スタッフに殺害させるという、ホロコーストに先じた極秘プログラムを開始しました。死者数の正確な把握は非常に困難ですが、通説では21万5千人から30万人のドイツ人およびオーストリア人が殺されたと考えられています。悲劇的なことに、プリンツホルン・コレクションに作品が収められていたアーティストの多くも犠牲となりました。

一方、プリンツホルン・コレクションは戦争を乗り越え、ハイデルベルク大学に収められました。当時は1840年以降に作られた作品6千点からなり、以降も収集が続けられて、現在までに2万点の作品が追加されるに至っています。このミュージアムは、精神疾患に対する偏見や差別を払拭することを目標に掲げています。

英国のミュージアムが、いつ頃から心の不調を抱える人々に的を絞った取り組みに関心を持ち始めたかは定かではありません。少なくとも過去30年間で顕著になってきた、社会的包摂や社会正義を目指す幅広いアプローチの一端といえるかもしれません(そのうち参加型芸術については少なくとも1960年代以降⁹)。1997年にインディアナ大学で行われた共同プロジェクト「MATA: Museums as Therapeutic Agents(治療薬としての美術館)」について、シルバーマンが解説を記しています¹⁰。

2000年代には、言うまでもなく数多くの取り組みが行われました。パラント・ハウス・ギャラリーのもとで成長した団体アウトサイド・インがこの分野で頭角を現し、2006年には独立した慈善団体となりました。この団体の活動はこれに限らないとはいえ、心の不調を抱える人々との取り組みを重要なミッションとして掲げています。本書に掲載した事例研究の中では、グレンサイド病院博物館、グラスゴー美術館・博物館、メンタルヘルス博物館との協働を行っています。バースのホルバーン美術館は2007年、のちに「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」という名称になったプロジェクトに着手しました。

8 「書評 チャーリー・イングリッシュ著『奇跡と狂気のギャラリー』- ヒトラーの「退廃芸術家」の運命」ガーディアン紙 2021年8月5日 www.theguardian.com/books/2021/aug/05/the-gallery-of-miracles-and-madness-by-charlie-engish-review-the-fate-of-hitlers-degenerate-artists

9 「不穏な芸術:参加することの有利性と重要性」フランソワ・マタラツ著 2019年
入手先: arestlessart.com/the-book/download-a-digital-copy

10 『ミュージアムの社会福祉事業』ロイス・H・シルバーマン著 ルートレッジ 2009年

1960年代以降、地域ケア政策と脱施設化により、多くの精神科病院が閉鎖されました。それにともない、グレンサイド病院博物館(p.14)やメンタルヘルス博物館(p.18)など、精神病院が博物館へと生まれ変わった例もあり、似た事例は英国国外にも見られます(p.11参照)。

一方、本書には事例研究を載せていませんが、この領域の発展において独創的な役割を果たしてきたウェルカム・コレクションについても紹介します。この組織はメンタルヘルス研究を含めた資金提供を行う世界最大の慈善団体のひとつであり、創設者のヘンリー・ソロモン・ウェルカム卿が収集した医学史にまつわる世界各地の膨大な創作物を基盤としています。ウェルカム・コレクションのミュージアムおよび図書館は、2007年に開館し、2015年には複数の新しい展示室が増設されました。開館初期から、アーティストのポビー・ベイカーの展覧会「Diary Drawings: Mental Illness and Me(絵日記: 精神疾患と私)」や「Bedlam: The Asylum and Beyond(ベドラム: 精神病院とその周辺)」など、メンタルヘルスに関する注目すべき展覧会を数多く開催しています。増設された展示室のひとつ、ピーニング・ヒューマン・ギャラリーでは、医療・健康問題への問いかけとなるような作品の制作をアーティストに依頼し、ドリー・センとザ・ヴァキューム・クリーナーの作品を展示しました。彼らはともに、自らの精神疾患の経験を創作につながる実践の一部として捉えています。ドリー・センは自身の経験をもとに、ウェルカム・アーカイブの精神科の記録への応答として作品を制作しました。この取り組みに関連して、親組織にあたるウェルカム・トラストは、メンタルヘルスについての大規模な国際プログラム「マインドスケープス」を6都市で開催しています。

筆者の印象では、心の不調を抱える人々に対するミュージアムの役割を戦略的に考える取り組みは、長年にわたって数多く行われてきたもののいずれも定着せず、短期的なものになりがちであったように思われます。2008年にソーシャル・エクスクルージョン・ユニットによる報告書を契機に行われた国の社会的包摂政策の結果として、ミュージアムのための研修リソース「Open to All(すべての人に向けて)」が開発されました(上記のユニットの活動および政策はかなり前に終了)。2010年には、当時シンクタンクであったカルチャー・アンリミテッドが『心についてのミュージアム』を出版しています。その後の10年間には、ミュージアム・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟が有益な研究

や出版物を発表しました。なお、この団体はのちに文化・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟に統合されました。

研究

シルバーマンは2009年の著書『ミュージアムの社会福祉援助』¹¹で、ミュージアムが健康増進に寄与し得る5つの方法を概念的な広い観点から提示しています。

- 1、リラクゼーションの促進。
- 2、即時的な生理学的介入、もしくは即時的な感情的介入、あるいはその両方
- 3、心の健康に良い影響をもたらす内観。
- 4、健康に関する教育の促進。
- 5、公衆衛生の提唱。

ヌーラ・モースの著書『社会福祉の場としてのミュージアム』(2021年)は、いくつかの点でシルバーマンの議論を引き継ぐ内容です¹²。心の不調を抱える人々との取り組みに特化せずに、地域社会におけるエンゲージメントを担当するチームとタイン・アンド・ウィア地域アーカイブ博物館が協働して行っている取り組みについて幅広い考察を行い、物と人、両方のケアについて取り上げています。

メンタルヘルスの問題を抱える人々の生活に創造性をもたらす良い影響についての実証は急速に拡充しつつあり、世界保健機関(WHO)から概要が出版されています¹³。チャタージーとノーブルは2013年の報告書で、ミュージアムが心の健康に与える効果を以下のようにまとめています。

- 社会的孤立の軽減をもたらす、有意義な社会体験。
- 学習と新たな技能習得の機会。
- 不安の軽減をもたらす、落ち着いた体験。
- 楽観、希望、喜びなど、前向きな感情の増大。
- 自尊心の向上と、アイデンティティ意識の強化。
- インスピレーションと、意味づけを行う機会の増加。
- 病院や介護施設などの臨床環境から離れる、前向きな気分転換の機会。
- 家族、介護者、医療専門家間のコミュニケーションの増加¹⁴。

11 『ミュージアムの社会福祉援助』ロイス・H・シルバーマン著 ルートレッジ 2009年

12 『社会福祉の場としての博物館』ヌーラ・モースの著書 ルートレッジ 2020年

13 『健康とウェルビーイングの向上において芸術が果たす役割に関するエビデンスにはどのようなものがあるか スコーピングレビュー』
デージー・ファンコート、セルシャ・フィン著 世界保健機関 2019年 <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/books/NBK553773/>

14 『ミュージアム、健康、ウェルビーイング』ヘレン・チャタージー、ガイ・ノーブル著 ルートレッジ 2013年

取り組みの広がり

心の不調を抱える人々を対象としたミュージアムの取り組みは、どれほど頻繁に行われているのでしょうか。実施数は減少しているのでしょうか、それとも増加しているのでしょうか。

本報告書でその数を明確に把握することはできず、また、近年の研究でそうした集計を行っているものも見当たりません。そうした状況においては、興味深い事例研究として16件を取り上げるのが適切だろうと判断しました。もちろんこの分野の取り組みを行うミュージアム全てを取り上げられたわけではありませんが、そのような取り組みの事例はそれほど多いとは思われないのです。北アイルランドにおける事例研究は掲載できませんでしたが、リマジン・リメイク・リプレイ連合という組織をはじめ、関連する取り組みがあることは把握しています¹⁵。ミュージアムが私たちのウェルビーイングを高め、穏やかさをはじめ、さまざまなものを与えてくれるのだという認識は、相当程度広まってきたという印象は持っていますが、その一方で、特定のメンタルヘルスの問題を抱える人々との取り組みはそれほど進んでいないように思われます。

この分野のこれまでの研究は通常、心の不調を抱える人々についてではなく、より広範な人々を研究対象としてきました。2016年に発表された報告書は特に意義深い内容で、その前年にミュージアム・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟(当時の呼称)のもとで行われた調査に基づいて作成されました(現在、上記の同盟は文化・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟に組み込まれ、当時よりも多くの会員を擁しています)。この報告書は『仮報告書』¹⁶と呼ばれ、複数の著者が他の研究と並行して英国のミュージアムを調査しました。約2000館のミュージアムのうち261館から回答があり、603件の関連プロジェクトが報告されました。メンタルヘルスの「問題」を抱える人々向けのプロジェクトは驚くほど人気が高く、その実施数は高齢者向けと認知症向けに次ぐ多さだったのです。本書の著者たちはこのうち107件のプロジェクトについて確認も行っています。しかし、あくまで印象に過ぎませんが、報告書に掲載されていたプロジェクトの大半は、現在では実施されていないようなのです。2018年に発表された第2弾の報告書『ウェルビーイングのための場としてのミュージアム』¹⁷においては、心の不調を抱える人々との取り組みの事例研究はごくわずかでした。確かなことはわかりませんが、過去6

年間のうちにミュージアムにおける取り組みは減少してしまっただけでしょう。

しかし、ミュージアムにおける取り組みの減少とは対照的に、ペアリング財団と文化・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟が行った芸術団体についての研究によれば、心の不調を抱える人々との協働や、メンタルヘルスの問題に焦点を当てた取り組みを行っている芸術団体は、相当数存在すると思われます。当財団の報告書『クリエイティブ思考要覧』¹⁸に掲載している320のプロジェクトの中でもミュージアムによるものはごくわずかです(これは明らかに実際の割合よりは少ないと思われます)。

価値観と指針

この取り組みにおける価値観や指針は、他のさまざまなコミュニティとの取り組みと多くの点で共通しています。それは、人々に行動の主体性、他人からの尊敬、社会とのつながりをもたらすことです。

ミュージアム職員に向けた良質なメンタルヘルス支援

地域住民のメンタルヘルスに対する包括的で真摯なアプローチを実現するには、ミュージアム職員全員のメンタルヘルスへの対処や支援もまた考慮する必要があります。ミュージアムは他の多くの組織と同じく、予算削減や緊縮政策、パンデミックや生活費の高騰など、増大し続ける圧力にさらされています。職員の精神状態にはより大きな負担がのしかかっているのです。この状況に適切に対処するために、数多くの方法が挙げられます。マインドフルネスやアウトドア活動、ヨガといった予防法やウェルビーイングに焦点を当てることも大切ですが、それと同時に、重度あるいは慢性的なメンタルヘルスの不調を経験している職員がいる可能性も考慮し、偏見や差別のない職場環境を確保するための適切な対応も重要です。

安全防護対策

すべてのミュージアムは、心の不調を抱える人々のための十分な安全防護対策を今後整備していくことになると思われます。安全防護対策については、NHSパートナーと協働するなどして、専門的な機関からの更なる確認を得ることが望ましいでしょう。

¹⁵ 参照: reimagineremakereplay.org/showcase/head-and-heart

¹⁶ 『健康とウェルビーイングに寄与するミュージアム仮報告書』ミュージアム・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟 K・ラコイ、M・バツオウ、H・J・チャータージー他著 2016年 入手先: museumsandwellbeingalliance.wordpress.com

¹⁷ 『ウェルビーイングのための場としてのミュージアム第2弾』ミュージアム・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟 S・デスマライ、L・ベッドフォード、H・J・チャータージー著 2018年 入手先: www.museumsandwellbeingalliance.wordpress.com

¹⁸ 『クリエイティブ思考要覧』(第2版) ペアリング財団著 2022年

海外

ベスレム・マインド博物館(p.21参照)は、1247年に設立され、かつてペドラムと呼ばれた世界最古の精神科施設の記録文書や創作物を所蔵しています。とはいえ、ここが唯一の事例ではありません。18世紀末から19世紀末頃にかけて、欧州全域および新興国であった米国で精神科病院の建設が相次ぎました。当時は、建物や敷地が穏やかで良い雰囲気であることが求められ、医療的介入がない場合にはそうした美意識が患者の回復を助けると考えられていました。このような精神科施設に由来するミュージアムでは、通常、患者の体験や創作物における表現に焦点を置き、精神医学の歴史とあわせて展示しています。

なかでもヘルシンキの公園にあるラピンラフティ病院は、とりわけ美しい事例です。19世紀初頭に建てられて、21世紀初頭まで使用されたのち、市民が運営するウェルネスセンターに生まれ変わって「ラピンラーデン・ラハデ」と改称されました。心の不調を抱える人々向けの創作クラスや小さな博物館など、さまざまな活動を行っています¹⁹。一方、2022年の最優秀ミュージアム賞に輝いたのは、リノペーションを経て改称されたマインド博物館(オランダ、ハールレム)です。この博物館は、かつて疫病やハンセン病の病院として、また精神科病院として使われていたドルハイスと呼ばれる中世の建物のなかにあります。同館に

はもうひとつ拠点がおり、それは有名なエルミターージュ美術館アムステルダム別館のなかで、ここでは「アウトサイダー・アート」が展示されています。

デンマークのオーフス近郊にあるオヴァルタシ博物館は、リスコウの精神科病院のアーカイブや所蔵品を活用しています(なおマインド博物館は、p.21の研究事例の報告にあるように、オヴァルタシ博物館の事例を参考に作られました)。この博物館の名称は、1929年から1985年までこの病院で暮らしたアーティスト(本名ルイス・マルクッセン)にちなんでいます²⁰。

ベルギーのアントワープにあるギスラン博士博物館の歴史は、館名の由来となった先駆的な精神科医が行った改革プロジェクトに遡ります。ここは1857年に創設されたベルギー最古の精神科病院でした。「アウトサイダー・アート」もしくは「アール・ブリュット」の国際的なコレクションも所蔵しています²¹。

欧州以外の事例としては、米国ミズーリ州のグロール精神医学博物館²²、カナダのハミルトン・メンタルヘルケア博物館²³、オーストラリアのパース近郊のグーリュギャタップ・ギャラリー²⁴などが挙げられます。

平等性、多様性、包摂性

ミュージアムは、自らが市民活動の当事者であり、地域社会全体に開かれた存在であること、そしてその実現を妨げるあらゆる障壁を取り除く方策を希求していることを、ますます積極的に明示しようとしています。これは、いかにさまざまな人に来館してもらうかということにとどまらず、ミュージアムのコレクションにおいて誰がどのような形で表象されているかという根本的な問いかけでもあります。多くのミュージアムは、この課題解決の“旅”に乗り出したばかりであり、エリート層のみを対象とする排他的な施設というイメージの払拭に向けて、多くの取り組みが必要であることを認識しているでしょう。例えば、身体障が

い者や、近年でいえば有色人種やLGBT+のコミュニティをミュージアムに温かく迎え入れるという観点から考えるための長期的な取り組みが行われています。奴隷貿易とそれに関する事柄をどのように表象するかという議論は、こうした動きの一部に過ぎません。

心の不調を経験したことのある人々との対話も、この“旅”の一環です。その方法はすでになじみのあるもので、心の不調を抱える人々に耳を傾け、彼らの希望に添ってプログラムや活動を組み立てることで、彼らを対象とした活動のほか、より広範な対象に向けた活動も展開するというものです。しかし、多くのミュージアムはこうした取り組みを始めて間もないか、もしくはまだ正式には着手していないようです。

19 参照: lapinlahdenlahde.fi/en

20 参照: www.ovartaci.dk

21 参照: www.museumdrguislain.be

22 参照: www.stjosephmuseum.org/glore-psychiatric-museum

23 参照: www.stjoes.ca/about/our-locations/west-5th/hamilton-museum-of-mental-health-care

24 参照: www.goolugatup.com/

事例研究からわかるように、心の不調を抱える人々は非常に多様です。若者、大人、まだ診断を受けていない人、GP (General Practitioner/かかりつけ医) や地域のボランティア団体からの紹介を受けた「軽症」とされる人、症状が重度で慢性的な人まで多岐にわたり、なかには一時的に入院している人もいます。英国ではメンタルヘルスの不調は法的に障がい認定され、Equality Act 2010(2010年平等法)のもとで保護されます。心の不調を経験することは珍しくなく、非常に多くの人に関わる問題です。

誰もが自分のアイデンティティのなかにさまざまな側面を——すなわち交差性を——持っています。それらは互いに交差し、発達を続け、その時々で異なる特質がより強く表われます。これらの事例研究が示すように、対象を絞ったアプローチや、似た経験を持つ人々との学習や創造的な活動は、一部の人々にとって非常に意義深い経験となる場合があります。つまり地域社会において、とても価値のある支援の形になり得るのです。一方で、心の不調はあるもののこうした活動を必要と感じていない人々は、ミュージアムを訪れた際に、他の来場者と同じように尊厳をもって扱われることをシンプルに望んでいるでしょう。

実体験の尊重と、権力の不平等への理解

ミュージアムにおけるEDI(平等性、多様性、包摂性)には、実体験の価値に対しての考え方や、権力関係に対する理解が深く組み込まれています。ミュージアムは、当然ながら学識を重視する階層的な組織です。

知識の公平性²⁵という概念は有用であり、簡単に言えば、少なくとも3種類の知識があるといえます。学識や科学研

究を含む専門的な知識、アーティストが得るような実践に基づく知識、そして、特定のコミュニティの一員であることで得られるような実体験に基づく知識です。ミュージアムとメンタルヘルスにおいては、これら3種類の知識それぞれに役割がありますが、従来は学識のみが重視されたり評価されたりする傾向にありました。

メンタルヘルスに対する偏見や差別の解消

ミュージアムが反人種差別の立場を希求し、女性蔑視に立ち向かうなかで行っているさまざまな取り組みと同様に、メンタルヘルスの問題に対する偏見や差別の解消に向けた取り組みにおいてもさまざまな手段があります。ミュージアムのスタッフに向けたアプローチ、地域社会に向けたアプローチのほか、公的にどのような立場をとるかということも含まれます。シンプルな手段としては、5月のメンタルヘルス啓発週間や10月10日の世界メンタルヘルスデーなど、毎年恒例のイベントへの参加が挙げられます。ただし、黒人歴史月間の開催には価値があるものの、あくまで持続的なアプローチの一環と捉えられるべきなのと同様に、メンタルヘルスへの偏見や差別を解消する取り組みも、期間限定のイベントとみなされてはなりません。主催団体であるメンタルヘルス財団がこの点に関するアドバイスを提示しています²⁶。ミュージアムにとって有効なのは、メンタルヘルスを視野に入れた社会モデルを採用し、心の不調を抱える人々を含むあらゆるコミュニティを対象として、アセット・ベースド・アプローチをとっていることを明言することです。

25 事例参照: knowledgeequity.org

26 www.mentalhealth.org.uk/our-work/public-engagement/mental-health-awareness-week

事例研究

メンタルヘルス専門のミュージアム



「その木の葉は諸国の民の病を治す」
写真提供：ベスレム・マインド博物館

グレンサイド病院博物館

ステラ・マン 著

概要

ブリストルのグレンサイド病院博物館は、戦時下であった1915年、アーティストのスタンリー・スペンサー卿が雑役夫として床を磨いていた場所です。来館者は、グレンサイド精神病院(1861-1994年)、ストークパーク学習障がい病院(1909-2000年)、ポーフォート戦争病院(1915-1919年)という3つの病院に関する物語の探索へと誘われます。

当館は、1881年にブリストルの貧民収容施設の患者のために建てられた、ペナントストーンという石造りの美しい教会の中にあります。人々のウェルビーイングのために文化遺産を活用している珍しい施設です。教会は専門病院の壁で囲まれ整備された敷地内にあり、もとは患者たちが治療の一環として有意義な作業に従事したり、宿泊するための施設でした。このビクトリアン様式の教会に精神科病院を開いた背景には、一風変わった意図がありました。この教会は、ラザロの復活やイエスの誕生など、聖書のなかでも明るい場面を表現したステンドグラスや彫刻で飾られており、人々に希望を与えるような建築デザインなのです。

当館は独立した慈善団体として1994年に開館しました。私たちが最も重視しているのは、来館者がメンタルヘルスに想いを巡らし、学習障がいに対するケアについて学ぶ機会を提供することです。安全で刺激ある博物館という環境を通じて個人のウェルビーイングに対する人々の関心を高めるため、病院だった時代から収集されてきた創作物・写真・スケッチ・情報を展示し、また館独自のオンラインメディアを活用しています。当館の活動に時間を割いてくれるボランティアの人々とも活動していますが、そのなかには、他に多くの社会的役割がある人や健康面に問題を抱えている人もいるため、仕事の締め切りは柔軟にし、大枠の目標は流動的にすることにも取り組んでいます。当館のボランティア・プログラム参加者はそれぞれに得意なことを持っており、多様な才能が集まることで魅力的な展示が実現しています。

“グレンサイド病院博物館では、とても興味深く有意義な時間を過ごしました。過去の歴史や21世紀の今後の道のりについて考える機会を与えてくれる場所だと思います。個人的に特に良かったのは、拘束衣の目的とその背景にある理由について学べたことです”

アクセス・トゥ・ウェストイングランド・障がい者サービス

当館では2010年以来、来館者からのフィードバックを分析しています。来館者像を明確に把握でき、特色あるコレクションの活用に力を入れるうえで参考になるのです。年間約6万人が当館のWebサイトを訪れ、来館しています。「the UCL Museum and Wellbeing Measures Toolkit (UCLミュージアム幸福度測定ツールキット)」を使用したある人は、「この博物館は来館者のウェルビーイングに良い影響を与えるとともに、来館者にメンタルヘルスに関する所蔵品と対話するよう促す」と評価しました。このツールキットは、来館前と来館後にウェルビーイングに関連する感情を自己評価してもらうというものです。その結果、「インスピレーションを受けている」が23%、「熱中している」が16%、「やる気がある」が4.5%、「満足感がある」が3.5%、それぞれ増加しました。

一方、当館の所蔵品を活用したハンズオン体験は、創作物の歴史や目的、メッセージ性に焦点を当てることで、来館者にメンタルヘルス・ケアについての対話を促すよう設計されています。実施対象は、認知症患者、学生、専門的な医療従事者など、10~50人のさまざまなグループです。リピーターの多い人気のワークショップで、現在は年間1000人が参加しており、その数は増え続けています。

グレンサイド病院博物館の展覧会
「Looking to the Light(光を見つめて)」
Photo © Carly Wong



“これまでで最高の
スタッフ・ミーティングができました。
このワークショップを通して、
自分たちの仕事について
改めて考えることができました”

アヴォン・サマセット・メンタルヘルス・パートナーシップの
重症支援チーム

プログラムのハイライト

当館のウェルビーイング・プロジェクト「Captured on Paper(紙の上に捉える)」は来館者との関わりを増やすことを目的としたプロジェクトです。当館の所蔵品の中から、1950年代にブリストル精神病院の患者であり、またアーティストでもあったデニス・リードが残した鉛筆やペン、インクによる他の入院患者の繊細なドローイング83点を活用し、来館者にメンタルヘルスケアに関する絵の制作や会話への参加を促します。このプロジェクトでは、新たに多様な人々の来館を促すことを目的として、地域社会に働きかける絵画制作やハンズオン体験のワークショップを展開するため、博物館協会、エスメ・フェアベン・コレクション基金、

およびブリストル市議会の支援を受けています。グレンサイド病院博物館の来館者には、本人または家族が心の不調を抱えている人が多くいますが、このプロジェクトはそのような来館者の増加をもたらしました。精神疾患が身近にある来館者の割合は、2017～2018年の48%から2018～2019年には68%へと増えました。

直近では、グレンサイド病院博物館は、アウトサイド・インと提携を結ぶ英国国内のミュージアム3館のうちの1つとなりました。アウトサイド・インは国立の慈善団体で、健康・障がい・社会的状況・孤立により芸術界への参入が困難なアーティストに基盤を提供し、当館の所蔵品を調査する機会を提供することを目的としています。所蔵品を探訪する「New Dialogues(新しい対話)」の6つのコースは、グレンサイド病院博物館、グラスゴー・ミュージアムズ(p.14参照)、およびウェイクフィールドのメンタルヘルス博物館(p.18参照)が運営しています。この実現には国営宝くじ遺産基金、ジョン・エレマン財団、芸術基金の支援を受けました。30人のアーティストの反応は非常に多様でした。

アウトサイド・イン創設者兼取締役のマーク・ステイーンは次のように述べています：

「常に前提としていたのは、病院や健康増進施設で制作された芸術作品のコレクションに関するあらゆる研究や対



グレンサイド病院博物館における所蔵品のスケッチ
Photo © Stella Man



アーティストのステーブ・エドガーの作品
《Looking to the Light (光を見つめて)》
写真提供：グレンサイド病院博物館

話において、精神疾患の経験のあるアーティストが不可欠な存在であるとみなされるようにすることでした。

この取り組みに関わったすべてのアーティストの勇気やその勇敢さに感動させられました。彼らはこの領域の専門家であり、その研究や反応は学術的解釈や医学的解釈と同じくらい、あるいは多くの場合それ以上に意義深いものです

グレンサイド精神病院の所蔵品を調査するため、10人の才能あるアーティストが選ばれました。ジャッキー・ベネット、スティーブ・バーデン、スティーブン・エドガー、ジョージ・

ハーディング、ジャスミン・ヤニユレク、アナ・ラスボーン、アリー・スクーラー、アリソン・ウィルズ、ナターシャ・ハリソン、ダミアン・モーランです。拘束部屋から蚊を使う治療まで、博物館のさまざまな側面が彼らの想像力を刺激しました。最終展示では「Looking to the Light(光を見つめて)」というテーマが掲げられました。このテーマは、1897年に撮影されたチャールズ・ウェストという患者の写真と、今も館内をカラフルな光で染める、癒しを表現したスタンドグラスの窓から着想を得たものです。

今後の展開

当館は2024年に開館40周年を迎えるにあたり、「Protect Our Wellbeing (poW!)(自分たちのウェルビーイングを守る)」という新しい構想を立ち上げる予定です。この構想は、当館のボランティアや来館者が、このユニークなコミュニティと国の資産に対して当事者意識を高め、セルフケアと神経科学をより深く理解できるようにデザインされています。

“新しい対話プロジェクトを通して、
芸術が私にとってどのような意味を持つのか、
人生とのつながりを含めて
解きほぐすことができました。
このプロジェクトは、思い切って挑戦して
自信を深め、自分自身の創造的なプロセスを
信じて創作活動を行えるよう、
参加者を勇気づけてくれる内容です”

ナターシャ・ハリソン (アーティスト)

メンタルヘルス博物館

ジェーン・ストックデール、サリー＝アン・エバンス、フィル・ウォルターズ 著

概要

メンタルヘルス博物館(MHM)は、1800年代から現代までのメンタルヘルスケアの歴史をひもとく、ユニークで魅力的な創作物を所蔵する先進的なミュージアムであり、入館は無料です。所蔵品はウェスト・ライディング精神病院で作られたものを中心としています。現在の収集方針や、口述による歴史資料の増加により、現在もその拡充が続けられています。当館はウェイクフィールドのフィールドヘッド病院のなかにあります。この病院は、南西ヨークシャー・パートナーシップNHS財団トラストが運営しており、メンタルヘルス、学習障がい、地域社会へのサービス、および院内における低・中度の安全な法医学サービスを提供しています。

当館は、人々と関わり、コミュニティとの連携を構築し、心の健康に関する議論を始めることを活動の基盤に置いています。ここは共同制作の場なのです。サービス利用者、介護者、友人、家族、職員、訪問者といった方々と協力しつつ、思い込みや捉え方を刷新することに挑戦しながら、メンタルヘルスの歴史や今日のあり方について調査を行っています。私たちは、理解やウェルビーイングを育むうえで自分たちの歴史を解釈することがいかに有益かについて、情熱を持って考察しています。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックの時には、周縁化された人々との協力のあり方を変革するために力を尽くしました。その一例として、地域社会やサービス利用者が主導するグループとともに、展覧会や活動内容の監修をリモートで行ったことがあげられます。また貧困ライン上、もしくは貧困状態にある家庭における感情や心の健康に関する議論を活性化するため、子供向けウェルビーイングワークセットを地域のフードバンクに2500個以上配布しました。当館の「Green Year(緑の年)」構想では、ウェルビーイングを高めるために自然に触れて探求するよう促す楽しい活動を行っています。そのひとつが、「grow-alonger's(ともに成長する)」と称する100人のメンバーを募集して実施している、植物を種から育てるプロジェクトです。

“疲れて何もする気が起きない土曜日の午後、
裏庭に行きました。(中略)
1時間ほど鉢の整理や根覆いをしていたら、
気分が大分明るくなりました”

私たちが提供するウェルビーイングのための取り組みは、当館がフィールドヘッドの地域社会と来館者にとって安全な支援の場であるという当館の信念をいっそう強めるものです。当館はこれまで市民相談所と協力し、地域社会に向けたウェルビーイング活動の構築と発展に取り組み、現在はサービス利用者、職員、介護者に専門的な助言を提供するための診療を、2週間に1度を実施しています。

アウトサイド・インの「新しい対話」

当館が過去2年間、活動の主軸としてきたのは、国営宝くじ遺産基金の資金提供のもと、アウトサイド・インとの協働で行う「エクスプローリング・コレクション(所蔵品の探求)」と「キュレーティング(展覧会監修)」という一連のプログラムです。アウトサイド・インは受賞歴のある慈善団体であり、健康・障がい・社会的状況・孤立により芸術界への参入が困難なアーティストに仕事の機会や研修の場を提供しています。当館は2年間にわたり、この地域に住む素晴らしいアーティスト12人に所蔵品を公開しました。アーティストはそれぞれ所蔵品の調査や研究を行い、その結果として作品を制作しました。

「新しい対話」プログラムでは、2つの所蔵品に関するコースと1つのキュレーションに関するコースが行われました。新型コロナウイルス感染症の流行による英国全土でロックダウン中の2021年2月に、最初のコースが開始されました。テーマに基づいた一連のプレゼンテーションやワークショップ、研究活動を通じて、アーティストは所蔵品を調査しながらそれぞれの研究を進めそうしたなかで得た気づきに基づいて作品を制作しました。



「Recollections May Vary (思い出は異なるかもしれない)」展のポスター
写真提供: メンタルヘルス博物館

このような取り組みの一環として、私たちはウェスト・ライディング精神病院の患者による芸術作品の一部を調査しました。そのなかには、メアリー・フランシス・ヒートンが制作した刺繍見本のほか、繊細なレース編み、「意識の流れ」(心の中に生まれては消える思考や感覚を流れるままに記述する手法)で書かれた無記名の文章、精神病院の工房で制作された美しい木工品などがありました。私たちは難解で調査しがたいのある創作物を見つけ出し、それが持つ意味や、メンタルヘルスに関する現代的な課題との関連性を考察しました。そして、アイデンティティ、監視、制御、拘束、権力、自由、回復に関するアイデアなど、広範にわたる内容の濃い議論を展開しました。

プレゼンテーションとワークショップに続いて、アーティストはコースのファシリテーターと博物館のキュレーターから、各自が興味のある分野を研究して発見した物やテーマに創作活動を通して応えていく上での助言を受けました。アーティスト達がプログラムを通してそれぞれの探求を行って生み出した作品と研究、そして当館の所蔵品が本プログラムの基盤となっています。彼らの作品は、2022年2月に始まったオンラインの展覧会「Another Space Within (内部にあるもうひとつの場所)」で紹介され、本プロジェクトの最後の作品群は「Recollections May Vary (思い出は異なるかもしれない)」というタイトルで2022年12月まで博物館内の随所に展示されています(執筆当時)。

このプログラムの立案と実施にあたっては、柔軟性と臨機応変な対応が求められました。初回のコースはすべてオンラインで行われました。その後も、当館が病院の敷地内にあることから引き続き立ち入り制限されていたため、2回目の所蔵品コースとキュレーション・コースは対面とオンラインの両方で実施されました。オンラインでの発表や所蔵品を用いた対面のワークショップを通して、博物館にまつわる物語の一部を紹介することができました。しかし、実際に博物館の空間を体験してもらうことはできませんでした。アーティストと当館の所蔵品との間に物理的な距離があったため、創作物を歴史的な文脈や時系列のなかで捉えることは時に困難でした。また、場所の固有性に応答するようなサイト・スペシフィックという構想について検討するのも、また難しい課題でした。物理的な空間や既存の博物館の空間の中において、芸術や創作活動を通じた所蔵品への応答はどのように展開するのでしょうか。

“アイデンティティ、対比、制御は私が
作品のなかでずっと表現していることです。
(中略)この文章が突然ひらめきました。
自分では気づいていませんでしたが、
私はアーティストだったのです”

ドール (アーティスト)

実施方法や内容、範囲といったものが、頻繁に、しかも多くの場合、予想外の方向に展開したことで、結果としてプログラムはダイナミックでより柔軟なものとなりました。アーティストたちにはテーマについてより自由に展開するための余地があり、私たちが当初使用するつもりになかった所蔵品や資料も活用しながら創作が行われたのです。このような当プログラムの中で生まれた、有機的で流動的な館の所蔵品についての会話や参照の発展は、プログラム参加者にとっても、またコースのファシリテーターや博物館の職員にとっても、多くの新たな興味を掻き立てられるものとなりました。

アーティストは、プロジェクト期間を通じて、自分の経験についてじっくり考える機会を与えられただけではなく、展覧会の閉幕後には、プロジェクト・チームとともに、プロジェクトの評価者と協働する機会も与えられ、プロジェクトに対する詳細なフィードバック作成にも参加しました。フィードバックの中で、アーティストは、新たに身につけた表現技法やプロジェクトを通じて生まれたコミュニティへの帰属感についてふりかえています。また、過去の物語を読み解くうえでの責任や、展示内容をより豊かにする多様な解釈についても考察を加えています。このプログラムを経て生まれた変化について、参加したアーティストの一人は次のように考察しています。

“過去の歴史を慎重に評価し、省察しながら
自己の経験を探求する方法を見つけること。

私の実践方法が発展し、それによって、
オートマティスム(自動筆記)画家としての
私の作品の作り方は、まさに研究の方法にも
適用できることに思い至りました。

これに気づいたときは驚いてはっとしました。

ここに展示されている私たちの作品が
来館者に感動を与え、私たちの思いやりが
作品を通じて光輝くよう願っています。

多種多様な芸術表現を通じて、
ウェスト・ライディング精神病院の持つ深みや
豊かさを照らし出すことができているならば
嬉しいです”

カーラ・マックウィリアム (アーティスト)

今後の展開

このプロジェクトが、私たちの取り組みや当館の所蔵品への理解にもたらす効果をあなどるべきではありません。かつてウェスト・ライディング精神病院の患者が創作した、歴史的に重要な作品への注目度を高めることは、当館にとっても、また所蔵品のより身近な活用を目指す私たちの取り組みにとっても、もちろん有益なことです。しかしながら、当館の所蔵品に関するアーティストとの議論や彼らの洞察は、当館のチームに対して、個々人のレベルでも、また専門的な面においても、革新的な影響をもたらしました。プログラムが進むなかでアーティストがもたらした新しい対話、観察、洞察、そして従来の所蔵品に対する語り口への挑戦によって、当館の所蔵品の今後の活用方法ががらりと変わったのです。アーティストとの協力関係を続けることで私たちの物事の捉え方をさらに多様化させ、来館者を増やすための取り組みを通じて、私たちの活動をより広範に届けたいと考えています。また、私たちの実践に刺激的で新鮮な洞察をもたらしてくれるアウトサイド・インとの連携も継続していけるよう願っています。

ベスレム・マインド博物館

コリン・ゲイル 著



「その木の葉は諸国の民の病を治す」のために集められたもの 写真提供：ベスレム・マインド博物館

概要

ベスレム・マインド博物館は、心の不調を抱える人々の経験を記録し、彼らの成果を称える活動を行っています。当館は王立ベスレム病院(旧ベドラム)の敷地内にあり、この病院は775年の歴史を誇る現役の精神科病院です。私たちは、メンタルヘルス・サービスの利用者や精神的苦痛の経験がある人々は、当館の活動に直接関わる非常に重要な存在であると考えています。新型コロナウイルスのパンデミックの中では、そうした人々にアプローチすることが通常よりも困難になったと同時に、非常に重要な課題ともなりました。パンデミックによって、心の健康の問題が精神疾患のある人々だけに限らず、あらゆる人々の関心事となり、注目が高まったと考えられます。

THE LEAVES OF THE TREE FOR THE HEALING OF NATIONS (その木の葉は諸国の民の病を治す)

文化遺産の業界全体に長期的なロックダウンが敷かれたなか、ベスレム・マインド博物館も難しい状況に陥りました。2021年初めの数ヶ月間で英国ではロックダウン政策がステップ1、2、3と段階的に解除されていきましたが、博物館などの施設の開館は許可されませんでした。そこでこの時期、当館では新型コロナウイルス感染症の経験にまつわる思いを寄稿するよう広く呼びかけました。Twitter程度の短い文章をオンラインで受け付け、非医療用のマスクに書き込んで、このプロジェクトのために館内に設置した木に飾ったのです。毎週、新たに投稿された動画をYouTubeにアップロードし、博物館のWebサイトやソーシャル・メディアで共有しました。このプロジェクトの記録は永久保存されており、当館のYouTubeチャンネル²⁷で閲覧できます。

プロジェクトが2021年2月に始まった時点では、設置した木にはほとんど葉がついていませんでしたが、その後の数週間から数ヶ月にわたって、葉とともに、感動的なメッセージが記されたマスクが両端を吊り下げる形式で飾られてきました。春の訪れとともに英国国内のロックダウンが解除された頃、このプロジェクトも完結しました。この木は、当館の再開直後から6週間にわたって展示され、パンデミックや社会的制約の経験を振り返ったり、捉え直したりするきっかけを与えてくれました。当館が従来の対面による交流を再開し始めた頃、私には、人々が共有した経験がこの木に然るべきかたちで立体的に表現されているように感じられました。

本プロジェクトの着想の源となったのは、デンマークのオーフスにあるオヴァルタシ博物館が2020年末に立ち上げた「パンデミックの木」という、シンプルなタイトルの類似プロジェクトです。「その木の葉は諸国の民の病を治す」には44人が参加しましたが、そのなかにはメンタルヘルス・サービスの利用者を自認する人もいました。そして参加者全員が新型コロナウイルスや、それにとまなう社会的制約の影響を受けていました。動画の再生回数は、アップロードから3か月で4100回に達しました。本プロジェクトの成果に関する評価は、当館のデンマーク人の職員たちが行い、回答者の多くが当館によるウェルビーイングに関する取り組みへの興味を参加の理由に挙げたことがわかりました。ある参加者は次のように述べています。

“最近、愛する人を失いました。
(中略)このプロジェクトは、誰か他の人に
私の気持ちを伝える機会に
なるかもしれないと思ったのです”

そして本プロジェクトの根幹は間違いなく、私たちのもとに届いた次のような文章に書かれている通りです。

「私は学生です。同居する友人たちも私も心の病を患っており、適切な治療を受けることは叶わず、これまで互いを支え合ってきました」

「人々の存在が私を嫌な気持ちにさせるのです。私は重度の広場恐怖症なのです。ロックダウンはこれまでにない経験でした。他の人々も、今は私と同じような状況にあるのだとわかって、孤立感が和らぎました」

「ロックダウンによって、外の世界との関わりが限られ、それをコントロールすることができました。あの時、外出や他人と一緒にいるのは怖いことなのだと、社会は認識したのです。人に会うことを恐れ、会わないための言い訳をする必要もなくなりました。Zoomのおかげで、距離を保ったまま計画的に人間関係を築くことができるようになりました」

「新型コロナ感染症によってももの見方が変わりました。今では、すべてが一直線上に進むわけではなく、人々の感情は日々変わり得るということを理解できています。自分にとって何が最も重要なのかを考え、立ち止まって内省的に考えることが大きな支えになりました」

ベスレム・マインド博物館は、1年以上におよんだロックダウンの中で一連のオンライン・プロジェクトを実施し、その最後に行ったのが「その木の葉は諸国の民の病を治す」でした。正式な意味での治療的介入ではありませんでしたが、深い内省や自己開示を促したことは確かです。こうした成果は、このプロジェクトがもたらす当館の知名度の向上よりも、ずっと意義深いといえるでしょう。コミュニティに着目し、メンタルヘルスの問題に対して相当程度の投資を行うことは、当館にとって決して新しい挑戦ではありませんでしたが、そのためにオンラインやソーシャル・メディアを通じて人々にアプローチする手法は、このような状況によって必要に迫られることとなった新たなデジタル化への変革と言えるでしょう。当館にとって重要な学びとなったのは、こうしたテーマについてオンラインで投稿を募集することで、診断を受けていないものの心の不調を感じている人々にリーチできる、ということでした。匿名で良いのであれば、自らの意思に基づく判断として、彼らは自己開示を行いたいと思っているのです。こうした活動は今後も行いたいと考えています。

デジタル化に関するあらゆる取り組みは当館にとっての学びとなりました。また、本プロジェクトでは最終段階になるまで実施が叶わなかったことですが、鑑賞者が対面や生身の出会いで得ることのできる、ウェルビーイングに関わる価値の大きさについても実感することができました。

事例研究

(メンタルヘルスの専門性をもたない) さまざまなミュージアム

「People Make Museums(人々が作る美術館)」展にて
ホルバーン美術館のガーデン・カフェに展示された彫刻
2022年
写真提供: ホルバーン美術館



ビーニー美術館・図書館

ジェンマ・チャニング 著



ビーニー美術館・図書館「A Place of Safety (安全な場所)」展の展示風景 Photo © Jemma Channing

概要

ビーニー美術館・図書館は、歴史ある街、ケント州カンタベリーの中心に建つミュージアム、ギャラリー、図書館からなる複合施設です。2012年のリニューアル・オープン以来、健康とウェルビーイングにまつわる要素を活動全般に取り入れています。

あらゆる人を対象とした多岐にわたるプログラム「Health and Wellbeing (健康とウェルビーイング)」を展開し、その一環としてさまざまな所蔵品を活用しています。社会福祉団体と協力して緻密にプログラムを作り込むことで、参加しやすく、楽しく、意義深い体験を提供し、誰もが文化的な活動をすることで得られる効果を実感できるようにしています。

当館は長年にわたってメンタルヘルスの問題を抱える人々との取り組みを行ってきました。地域団体と連携して心の不調に苦しむ人々を支援するイベントや展示を行うほか、さまざまな来館者を対象に心の病に関する問題を紹介しています。

コロナ禍では、人々のウェルビーイングに深刻な悪影響を及ぼし得る孤独感を和らげるため、自宅にひきこもる人々が参加しやすいように活動内容を改良しました。また精神科の入院患者にとっては、従来の活動制限に加えてコロナ禍の社会的制限も受け、外出や訪問者との面会ができなくなるという、普段にも増してつらい状況にあることも意識していました。

本プロジェクトについて

当館はロックダウン中、地域のNHSメンタルヘルス・サービスであるケント・メドウェイ・パートナーシップNHSトラストと協働し、彼らの心理学チームを通じて病棟にハンズオン体験ボックスを貸し出しました。体験ボックスは定期的に取り替え、病棟の職員には体験ボックスに含まれるものの情報や活用方法を説明し、運用しました。体験ボックスはロックダウン中の12か月間に6つの病棟で合計1800回使用されました。患者やスタッフの評判は上々で、患者からは「普段行わないような活動に参加できて楽しかった」、スタッフからは「いつもは病室での催しに参加しない患者が、体験ボックスのセッションには参加した」などの反応が寄せられました。とりわけ楽しんだ患者たちからは「他の時代をテーマにした特別な体験ボックスを使ってみたい」という要望が出るほど好評で、患者たちが次のセッションを心待ちにしている、という報告を受けました。

そこで当館は、身近なコミュニティからイギリス全土に至るまで、様々な場が現在直面している課題として、メンタルヘルスをテーマとする展覧会の開催を決めました。こうして実現した「A Place of Safety (安全な場所)」展では、これまで精神疾患がどのように概念化され扱われてきたのかを考察するとともに、精神病院という「安全な場所」について焦点を当て、その「安全」とは実際にはどのような意味だったのか、という問いを扱いました。

特筆すべきことは、この展覧会はその準備段階から、メンタルヘルス支援サービスの利用者、キュレーター、メンタルヘルスの専門家などの助言を取り入れたことです。この展覧会で展示された現代美術作品を手がけたのは、全員うつや不安、精神病など多岐にわたる心の不調を何かしら実際に経験したことがあるアーティストです。

さらに、この展覧会は治療の場そのものに焦点を当てるので、入院中の患者もこの展覧会に関わり意見を表明できるようにしたいと考えました。そこでケント・メドウェイ・パートナーシップNHSトラストに相談して、これまでのつながりをいかして患者にも展覧会作りに参加してもらえよう調整しました。

患者たちは病棟で、当館所蔵の作品画像や、かつての州立精神病院であり1993年に閉鎖されたセント・オーガスティン



ケイト・リチャードソンの作品
写真提供:ピーニー美術館・図書館

病院のコレクションを活用したセッションに参加しました。そしてグループ・ディスカッションとオブジェを扱うセッションを体験し、その後自分たちにとっての安全な場所とは何かを探る創造的な活動を行いました。美術館への来館が難しい人々に対して、美術館から離れた場所で文化的な関わり場の提供することで、美術館を身近なものにし、また患者たちに自らの経験を話してもらう機会を作ることができました。かつてのセント・オーガスティン病院のことを覚えている患者や職員も多く、ともにワークショップに参加しました。

患者たちはサポートを受けながら詩を書くことから創作活動を始めましたが、彼らの多くは自発的に創作を続け、展覧会に向けて絵やスケッチ、ランタン作りを行いました。完成した作品は、ルイス・ウェイン、リチャード・ダッド、ドリー・セン、リズ・アトキンらアーティストの作品とともに展示されました。

“今日ここに来て、自分の作品を目にして…
すごく特別だなんて思います。”

“正直、本当に感動しています。
素晴らしいです。”

“自分が何かの一部になれるのは
いい気分です。”

なお、このプロジェクトのさなか、私たちは地域の新しいメンタルヘルス病棟の設計監修責任者に会い、患者や職員から寄せられた意見を病棟の建築担当チームに伝えることができました。

当館がケント・メドウェイ・ミュージアム・パートナーシップのスタッフと連携することで、この展覧会に関わったすべての入院患者に対して、自分たちの作品が展示されている展覧会場を（職員のサポートも得ながら）訪れ、しばらく館内で過ごしてもらう、という機会を提供することができました。患者や職員からの感想は非常に好意的なものでした。

ハンズオン体験セッションの参加者については、心理学の専門スタッフによって定量的データと主題分析の手法の観点から記録が取られました。この記録からは次のようなことが明らかになっています。

入院患者の**90%**が病棟で実施されたプログラムに参加した。

参加した患者の**88%**が、活動を通して他の患者や職員とのつながりが得られたと感じた。

参加した患者の**96%**が、自分の作品がビーニーに展示されたことについて肯定的な感想を持った。

参加した患者の**92%**が、ハンズオン体験や創作体験は良い経験になったと回答した。

今後の展開

当館は今後もケント・メドウェイ・パートナーシップNHSトラストとの連携を続け、今回得た成果をさらに発展させていきます。患者と職員の両者から、患者が退院して自宅に落ち着くまでのギャップを埋めるための支援が足りていないという指摘がありました。当館は現在、退院後の患者への支援体制を整えるため、上記トラストのサービス改善チームと協力し、症状の回復を助けたり、地域社会への関わりを促したりするようなミュージアム活動の実施を目指しています。

また、神経心理学チームや精神病早期介入チームとの取り組みを含め、さまざまなサービス利用者団体の参加機会を増やすことにも注力していきたいと考えています。

ダリッジ・ピクチャー・ギャラリー Together through Art (アートを通して共に)

ジェーン・フィンドレー、ケリー・ロビンソン、アレックス・ボウイ 著



「Together through Art (アートを通して共に)」ワークショップ Photo © Dulwich Picture Gallery

概要

私たちは革新的な美術館として、アートとの有意義で包摂的な出会いを提案してきました。過去から現在までの芸術を通して、あらゆる人の心を動かし、視野を広げる文化施設の実現を目指しています。芸術作品を「広く人々の目に触れるように」展示するという、当館創設者の革新的な考えを継承して、展覧会、共同制作の展示、コミッションワーク、創作体験といった画期的なプログラムに取り組んでいます。人々の生活に創造性を組み入れることで、より健康的でウェルビーイングな地域社会を形成し、前向きな変革を起こすための仲介者になりたいと考えているのです。従って当館の活動全般では、他団体とのコラボレーションが重視されています。サザーク、ランベス、ルイシャムの地域社会にしっかりと根を下ろし、草の根コミュニ

ティ、芸術やVCSE (Voluntary, Community and Social Enterprises/ボランティア、コミュニティ、社会的企業)の団体やネットワーク、そして学校や高等教育機関等との協働を行なっています。多様な意見の受け皿となり、地域社会のニーズに応じて力強く進化しているのです。私たちが特に力を入れているのは、社会とのつながり、就業力、そして人々の健康とウェルビーイングです。

当館の「Health and Wellbeing (健康とウェルビーイング)」プロジェクトでは、芸術や創造性を用いてメンタルヘルス、社会的孤立、慢性疾患の改善を促す支援活動を健康関連団体と協働して行っており、地域に根ざしたアプローチを推進しています。こうした取り組みは、ロンドン南部モーズリー NHS財団トラスト (SLaM) のリカバリー・カレッジとテッサ・ジョーウェル・ヘルスセンターとの連携を

通して発展してきました。その内容には、メンタルヘルス支援サービスの利用経験者との共同制作、人々のウェルビーイングのためのツールとして芸術を用いる社会的処方、そして癒しをもたらす環境を整えるための芸術作品の制作依頼などがあります。

当館は、芸術に触れる機会が、心の不調を抱える人々を支援する貴重なリソースになりうることを認識していました。地元の健康に関する団体とのパートナーシップを結んで事業に取り組むことで、地域のニーズに答えるプログラムやプロジェクトを開発してきました。また当館の所蔵品、展覧会、敷地を人々の健康とウェルビーイングを支援するためのリソースとして活用する新しい方法も提供してきました。

「Together through Art (アートを通して共に)」

ダリッジ・ピクチャー・ギャラリーが実施するプログラム「Together through Art (TTA/アートを通して共に)」は、心の不調を抱える若者を支援し、メンタルヘルスにまつわる偏見をなくすことを目指しています。

ロンドン南部モーズリー NHS財団トラスト (SLaM) のリカバリー・カレッジと連携し、子供もしくは大人向けのメンタルヘルス・サービス利用経験者で、この地域に住む18歳から25歳までの5人の若者を対象に、有給の育成・研修プログラムを試験的に実施しました。その目的は、参加者各自がウェルビーイングにつながる創作活動をいかに自分の生活に取り入れてきたかをシェアする手段や機会の提供であり、こうした取り組みによって優先支援地区に住む子供や若者を支援することを目指しています。

“私は芸術とメンタルヘルスを
結び合わせてきましたが、
今後はさらにそのつながりを
発展させたいと考えています。
アーティストとしても、
自分の心の安定に取り組んできた経験からも、
創造性が癒しとなる場を作るためには、
できるだけ多くの情報を
集める必要があると思います”

参加者

参加者はそれぞれ、当館とSLaMリカバリー・カレッジが開催する、クリエイティブ・ピア・ファシリテーターズ (Creative Peer Facilitators/CPFs) 養成の6ヶ月間の有給研修プログラムに参加しました。CPFsは、当館のアーティスト・チームと協働し、共同でデザインし、共同で届ける、という共同制作の方法論を活用して、優先支援地区の小中学生を対象とした創造性とウェルビーイングのための特別ワークショップを企画、実施しました。ワークショップでは、創造性をもたらす回復力、マインドフルネス、文化資本などについて考えるための出発点として、当館の所蔵品を活用しました。

このプロジェクトで最も難しかったことのひとつは、創作活動を提供するさまざまなチームと学校団体との調整でした。500人以上の子供や若者が参加したため、創作ワークショップを行うスペースを当館のアートスタジオ内に確保するのは、かなり調整が難しい仕事でした。また、CPFsの若者たちを終始しっかりとサポートすることも非常に重視しました。

当館にとって、このプロジェクトから得られた最大の財産のひとつは、CPFsたちがこのプロジェクトのみならず、館全体にもたらした経験やアイデア、熱意です。彼らが率直に話してくれた心の不調にまつわる経験は斬新な視点を与えてくれるもので、このプロジェクトを成功に導く鍵となりました。

このプロジェクトで連携した学校の多くは、これが当館のプロジェクトに参加する初めての機会となる学校でした。そのような学校が参加を決めた主な理由のひとつは、ロックダウン後に学生の不安が高まり、以前よりも精神状態が不安定になったことでした。ある女性の教師は「心の健康やウェルビーイングに寄与する芸術を軸とした取り組みをどのように企画・進行したらよいか、深く理解したかった」のだといいます。このワークショップを経た教師たちの感想には「誰もが参加しやすく、十分なリソースがあった」「子供たちが自分の感情をコントロールするための知識を深く学べた」といったものがあり、効果に関しては、「学校全体の文化資本の価値が向上した」「所蔵品のさまざまな活用法が明確になった」などの意見が寄せられました。また、このプロジェクトのマインドフルネス・セッションから着想を得て、学校でも同様の取り組みが行われました。

“自分の心の不調の経験を
活動に活かすというのは、
私にとって非常に新鮮でユニークな体験でした。
心の安定にアートがいかに寄与するのかを
参加者に伝えられたことは、
私自身、心が不安定な時期についての
気づきを得たり、
理解を深めたりするきっかけとなり、
自分のキャリアや個人的な取り組みにおける
目標を見出すことができました”

クリエイティブ・ピア・ファシリテーター

CPFs全員がこのプロジェクトを通して、創造的なセッションを企画、提供することに対する自信を深めることができました。特筆すべきことに、彼らは皆、その後も当館もしくは他の組織でクリエイティブ・ファシリテーターとしての活動を続けており、共同作業をしたアーティストと築いた関係性は、今後の仕事に取り組むうえでも強い支えとなっています。

“才能があり、几帳面で、熟練した人が
大勢いる環境を経験できたことは、
複数のチームがいかに協力してこうしたことを
成し遂げるのかを知る
素晴らしい機会になりました。
パンデミック下であっても、
芸術関連の仕事は手が届かないわけでも、
存在しないわけでもありません。
むしろ、その逆なのです”

クリエイティブ・ピア・ファシリテーター

今後の展開

このプロジェクトを通じて、当館は地域の創造的なコミュニティとの間に新たな強い関係性を築くことができました。サザーク地区の助成も得て、地域の6歳の児童を対象とした中等教育への移行支援のワークショップも提供することができます。ワークショップとはどのようなものなのか、という当館がTTAのプロジェクトから学んだことをいかに、新たなワークショップを考案し提供するために、これからはCPFsのTTAチームやアーティストと協働していくつもりです。

目標は、今回のTTAの取り組みをモデルとし、その中で学んだことや参加者からコメントをいかしつつ、もう一つのTTAプロジェクトを来年実施することです。今回は視覚芸術を中心としたプロジェクトでしたが、演劇やダンスといった新しい芸術形式も取り入れられたらと考えています。

ダリッジ・ピクチャー・ギャラリー
ジェーン・フィンドレー（プログラム&エンゲージメント長）
ケリー・ロビンソン（ラーニング&エンゲージメント担当マネージャー）
アレックス・ボウイ（学校プログラム担当マネージャー）

www.dulwichpicturegallery.org.uk/learning/access-and-participation/participation-projects

ディラン・トマス・センター

ジョー・ファーバー 著



ワークショップ「Literature and Trauma (文学とトラウマ)」の参加者とエリック・ンガル・チャールズ

写真提供: スウォンジー市議会/ディラン・トマス・センター

概要

スウォンジーにあるディラン・トマス・センターには、詩人ディラン・トマスに関する常設展示「Love the Words (言葉を愛する)」があり、文学のプログラムのほか、ラーニングやエンゲージメントのプログラムも実施しています。スウォンジー市議会が提供する文化事業の一環として運営されており、ディラン・トマス研究の国際的な拠点であるとともに、地元の人々や観光客、さまざまな年代の学習グループが利用するミュージアムです。

トマスの作品は文学、創造性、アイデンティティの探求の端緒となるものであり、当館は人々の自己表現をサポートする活動に力を入れています。子供向けの文芸創作ワークショップや館内外での家族向けアクティビティの他、地元や国内の組織、海外の組織との提携プロジェクトなども行っています。

また、難民に関わる活動にも長期的に取り組んでいます。

1999年、イギリス政府が亡命希望者をスウォンジーに「分散させる」と発表したことがありました。これをきっかけにSASS(Swansea Asylum Seekers Support Group / スウォンジー亡命希望者支援グループ)が設立され、難民の支援、公平性と多様性の推進、地域社会の結束の促進、難民のための就労支援、高等教育における難民問題についての学習機会の提供などに取り組んできました。SASSは、とりわけスウォンジー市議会や当館と密に連携して共同プロジェクトを実施していますが、アフリカン・コミュニティ・センターやシティ・オブ・サンクチュアリなどの組織とも連携しています。2000年代初頭以降、当館は難民や亡命希望者、地域住民が創作した文章を集めた文集の発表イベントを主催し、過去5年間にわたってそれぞれのコミュニティ向けに文芸創作のワークショップを開催してきました。

文芸創作とウェルビーイングとの関連性は広く知られています。また、避難先を探す人々との定期的な対話や支援サービスを通して、彼らの支えとなる刺激的な創作の場が

求められていることも明らかとなっています。他の組織と提携することで参加者のニーズに確実に応えることが可能となっており、例えば、アフリカン・コミュニティ・センターを通してカウンセリングを行ったり、シティ・オブ・サンクチュアリがスタッフ研修を実施したりしています。現在当館が行っている文芸創作ワークショップは実践的であるとともに柔軟なもので、参加者との話し合いやフィードバックの機会を持ちながら進められています。

「Literature and Trauma (文学とトラウマ)」 ワークショップ

当館のワークショップ「Literature and Trauma(文学とトラウマ)」を率いるエリック・ンガル・チャールズは、カメルーン出身の著名な作家で、特に難民体験のトラウマについて考える文芸創作ワークショップについて豊かな経験を持つ指導者です。これまでにSASSの出版部門ハファン・ブックスとの共同編集で、難民や移民、先住民の作家が執筆した詩選集を出版してきました。彼自身、ウェールズで避難先を探した過去があり、その経験を創作手法にいかしています。また7つの言語を話せるため参加者との意思疎通に非常に役立っています。このワークショップは6～8回のセッションで完結するもので、年に3回ほど開催されています。参加者は自分の都合がつく時に出席すればよく、コミュニティの性質上、途中から加わる人もいれば、姿を見せなくなる人もいます。活動内容は気軽に参加できるよう設計されており、他の予定がある場合にはセッション中の入退室も自由です。

できるだけ参加しやすくするため、当館がバスの一日乗車券代を負担し、軽食や子供向けのアクティビティも用意しています。小さな子供を持つ親は、こうしたワークショップに参加しようとしても託児先が限られています。当館の「学習スペース」ではそうした不都合は起きません。空間を区切って、参加者用の教室の隣に子供が遊ぶ「隠れ家」を用意できるのです。これにより、2つの素晴らしい成果が得られました。こうしたサービスなしでは参加できなかった人々が自分たちも温かく受け入れられていると実感できたこと、そして我が子もまた、このような恵まれた教育環境に迎え入れられるのだと安心できたことです。このように当館は家族連れを歓迎しており、ファミリー・フレンドリー(家族連れに優しい)の理念を体現しています。こうした環境があることで、ファミリー層は展覧会に繰り返し足を運びやすくなり、また館主催の家族向け学習プログラムにも参加しやすくなり、さらにスウォンジー市議会の文化サービス全般で行われているさまざまなイベントの情報も手に入りやすくなるのです。こうしたイベントへの参加について(多くが参加費無料にも関わらず)ハードルが高いと感じていた人や、申し込みができることさえ知らなかった人もいでしょう。文芸創作セッションを機に来館者が増え、コミュニティの結束が高まり、人間関係が育まれ、一体感が増すという良い変化が起きているのです。



ワークショップ「Literature and Trauma(文学とトラウマ)」の参加者
写真提供: スウォンジー市議会/ディラン・トマス・センター

“多様な参加者がどうやって自信を深め、
コミュニケーションの力や社会的スキルを
磨いていくかを目の当たりにするでしょう。
人との交流の場は希望を与えてくれます。

継続的に参加すること、
そして各自のストーリーを語る他者に
耳を傾けることでインスピレーションや意欲が
湧いてくるのです。

似たような状況にある人々との出会いは
一種の現実逃避でもあります。

しかし重要なのは、
参加者それぞれが自分の声や自分の物語を
話すための独自の方法を
磨き上げていくということなのです”

エリック・ンガル・チャールズ

2020年、この取り組みが「Museums Change Lives(ミュージアムは人生に変化をもたらす)」の小規模ミュージアム・プロジェクト最優秀賞に輝き、当館では指導者のエリックと参加者たちを称えました。また、この受賞を機にプロジェクトへの関心がさらに高まるなか、他の組織もこうした活動を取り入れてそれぞれの状況に合わせて実施できるよう、当館における開発の経験を広く発信することができました。エリックと私は、2021年に移民博物館が開催したイギリス南西部およびウェールズ地域を対象とした会議や、2022年の国際博物館会議(ICOM)の大会で、そうした内容を発表しました。国際的なプログラム「アジェンダ21パイロット都市」と「ウェールズの将来世代コミッショナー」においては、優れた実践的事例研究のひとつに挙げられています。

今後の展開

当館が掲げる構想のひとつは、人々がこうしたプログラムに参加できる機会を増やすために、さらなる協力関係を構築することです。例えば、CADW(ウェールズ政府歴史環境事業)との連携により、かつてディラン・トマスが住んでいた町にあるラファーン城での見学と文芸創作セッションを計画しています。また、エスメ・フェアベーン・コレクション基金プロジェクトによるSASSの単発イベントとして、家族向けの学習会や文学を軸としたアクティビティを企画しています。さらに、ワークショップ「Literature and Trauma(文学とトラウマ)」の次回シリーズから着想を得て参加者が作品を書き、それを文集にまとめたとも考えています。

“もしその人に意志があれば、友人のように、
あるいは今では家族のように、
このプロジェクトに参加して
自分の物語を話すよう勧めています。
私は自分たちがなにを経験してきたのか
話すのが好きです。
人生には大変なことがたくさん起きますが、
それでも私たちは今ここにいて、
人前で話す機会があります。
以前は緊張しましたが、
エリックがいつもこう言ってくれました。
「あなたの物語を話せるのは、
あなただけだ」と。”

サバ (ワークショップの参加者)

ファウンドリング(孤児院)博物館 Tracing Our Tales (私たちの物語をたどる)

ルーシー・アンダーソン、大英帝国五等勲爵士 カロ・ハウエル 著



ファウンドリング博物館における「Tracing our Tales (私たちの物語をたどる)」の研修生たち Photo © Louis Mealing

概要

ロンドンのファウンドリング博物館が掲げるミッションは創造的な活動を通して人々の生活を改善すること、とりわけ児童養護施設や里親のもとから自立する若者、恵まれない状況におかれている子供や貧しい家庭で暮らす人々の暮らしを改善することです。

当館はファウンドリング病院の物語を紹介しています。この病院は1739年に、捨てられるリスクのある乳幼児の保護のため、イギリス初の子供のための慈善団体として設立されました。また、ファウンドリング病院は画家のウィリアム・ホガースとトマス・ゲインズバラ、作曲家のゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルなどから作品の寄贈を受けた、イギリ

ス初の公共美術館としても知られます。現在は、展覧会、プロジェクト、学習プログラムを通じて当館がたどってきた驚くべき歴史に光を当て、今もあらゆる年代の人々に関わりのある物語だということを伝えています。

乳幼児の保護から始まった当館の歴史は、若い来館者、その中でもとりわけ社会的養護を経験した人々の関心と呼ぶ内容です。2017年に開始した「Tracing Our Tales (私たちの物語をたどる)」というプログラムは18歳から26歳までのケアリーパー(児童養護施設や里親のもとで育ったのち自立していく時期にある若者)を対象とした有給のミュージアム研修という、これまでになかった試みであり、5ヶ月間におよぶコースです。

子供たちはさまざまな理由で養護の対象となりますが、特に多いのは虐待と育児放棄です。社会的養護の下におかれることがトラウマとなるケースが多く、当館の活動に関わっているそうした経験のある若者の多くは、何らかの心の病(PTSD、不安、うつ)を持ち、複雑なニーズを抱えています。

「Tracing Our Tales(私たちの物語をたどる)」が成果を上げ、参加者の自尊心や自信に与えた良い影響が長期間にわたって続いたことから、当館ではこうしたアーティスト主導の取り組みを他の領域にも応用しようと考えました。そこで近年では、マインド・カムデンと新たなパートナーシップを結び、当館の所蔵品から着想を得て創作する8週間のプロジェクトに、マインド・カムデンのメンバーが参加するという試みを始めています。また、モーズリー病院の摂食障がい外来患者サービスとの提携では、患者とともに各自の経験や人生、感情について探るプロジェクトを行っています。

保育園でのワークショップから、心の不調を抱える大人向けの社会的処方プロジェクトまで、当館における地域包摂的な取り組みはすべて、プロのアーティストが主導して実施しています。これは特に、児童養護施設や里親家庭で暮らした経験がある若者との取り組みにおいて重要です。というのもアーティストは自己決定や自信を持つことの揺るぎないロールモデルであり、関わりやすく、断定的な評価を下さず、欠点ではなく長所に注目して若者たちをサポートし、勇気を与えてくれる存在だからです。

「TRACING OUR TALES (私たちの物語をたどる)」

当館が5年前から実施している研修プログラム「Tracing Our Tales(私たちの物語をたどる)」は、他のミュージアムの事例にはない、当館独自のプログラムです。当館のアーティスト・プロジェクト担当のキュレーター、エマ・ミドルトンが主導しており、2021年以降はペアリング財団の資金援助を受けて研修コースを倍増し、年2回の開催となりました。春から夏にかけてはアーティストのアルバート・ポトロニーによる視覚芸術コース、秋から冬にかけては作家ベリンダ・ジャウィの文芸創作コースを実施しています。

参加する若者は、この有給の研修プログラムを通してさまざまな創作技術や生活スキルを磨き、館内での家族向けワークショップの企画・提供の経験を積むこともできます。研修では研修生のこれまでの経験が受け入れられ、それぞれの生き方と関わりが持てる内容になっています。エマは、児童養護施設や里親のもとから自立する若者を支援しつつ、そのためのリソース提供を行う団体と密接な協力関係も築いており、そのつながりを通して参加者の募集を行っています。1コースにつき10～15人の若者を募集し、そこに彼らを励ましたり意欲を引き出したりするような優秀な卒業生1～2人が加わります。少人数だからこそそれ

ぞれの人生にとって、根本的かつ持続的な変化をもたらすような長期的なサポートを提供することができます。

研修を受けた若者の感想に多いのは「自分と似た経験を持つ人と知り合う貴重な機会となり、深いつながりを感じられた」というものです。博物館の環境が、繋がり感覚を与えているのです。この感覚は、彼らが今後お互いに支えあうための仲間づくりのきっかけになります。また、研修生の誰かが何かつらい経験をしている場合、たいていグループ内に似た経験を持つ人がいて、助言することもできます。セッションでは多くの場合全員で意志決定を行い、グループの絆を深めます。

研修生は各自さまざまな心の不調を抱えており、多くの場合、著しく低い自尊心や自信のなさを抱えています。ワークショップのファシリテーターは、研修生を意思決定に参加させ、活動計画に貢献するよう促すことで、彼らの主体性や自主性が尊重されていることを明確に示し、自分を信じる力を育ませます。活動はバランスをみながら慎重に実施されており、安心できるいつもの場所から一歩踏み出すよう研修生に促しながらも、自分でコントロールしやすく、勇気が出る範囲内で行えるよう気を配っています。

“この研修に参加したことで、
アートのスキルを磨くための自信と、
自分の創造力をへの確信を得ることができました。
ロックダウンの中で唯一の楽しみでした。
プログラムのおかげで目標ができ、
小さな物事のなかに美しさや可能性を
見つけようと意識を集中できるようになりました”

シェリー・ダンバー

(2021年の研修プログラムの最優秀修了者。
近年、ファウンドリング博物館の評議員に任命)

研修生にはコースの一環として、当館の家族向けワークショップのアシスタントとして有給で働く機会が与えられますが、コース修了後も引き続きワークショップを運営して、さらに技術を磨き、自信を深めることができます。それ以外にも修了生は、高等教育機関で学びを深めたり、行政でインターンシップをしたり、大英博物館やダリッジ・ピクチャー・ギャラリーなどの他のミュージアムやギャラリーに就職したりと、さまざまな進路に進んでいきます。

この研修についての評価は、視察や取材を通じて客観的に行われており、出席状況、人口統計情報、過去および現在の参加者や彼らのケースワーカーに対するフォローアップの情報等が収集され、長期的な影響に関する評価が行なわれています。最新の調査では、研修を受けた全員が「社会

的養護下におかれた経験がある若者に、この研修を受けるよう勧める」と回答しており、研修生の67%が「自分を信じる力や自信が得られた」と評価しています。

参加者からは「心の状態が改善した」という報告もありました。この研修への参加以前は、重度の社交不安で定期的な外出ができなかったある女性の研修生は、次のような感想を寄せています。

“友達ができて、
毎週、時間通りに外出しています。
私の意見が尊重されたことで、
拒絶されるのではないかとこの恐怖心にも
対処できるようになりました。
素晴らしい経験です。
おかげで自信を持てるようになりました”

研修生

毎年、研修生は制作した作品を当館の第1展示室に展示します。自分の存在が認識され、発言の場を得て、博物館の文脈のなかで自分の物語を自ら語るができるのです。この研修プログラムは、来館者に対して新しいものの見方を提示し、300年以上の歴史があるファウンドリング病院の物語への関わりをもたらすものでもあるのです。

今後の展開

「Tracing Our Tales (私たちの物語をたどる)」は、当館のコミュニティ包摂活動の軸となる取り組みです。この成功を機に、自立援助住宅に住む10代の若者向けの試験的な取り組みなど、数多くの新しいプロジェクトが発足しました。

研修制度は拡充を続けており、そのなかで新たな取り組みも始まっています。開発中のケアリーバー向けポータルサイトでは、研修プログラムの一部をシェアし、クリエイティブ業界への進路の支援が行われる予定です。また、ジョン・ライオンズ・チャリティからは、ケアリーバー向けの1年間のフェローシップに資金提供を受けています。加えて研修修了生との新しいプロジェクトにも着手しており、当館のコレクション、ロンドン・ナショナル・ギャラリーからの貸し出し作品、新規の委託制作作品を紹介する、2023年春開催予定の展覧会を共同キュレーションしています。

グラスゴー・ミュージアムズ Art Extraordinary (超アート)

クレア・コイア 著



2018年にプロジェクト・アビリティがキュレーションした展覧会「That's Extraordinary! (これは超すごい!)」の展示ケース

Photo © CSG CIC Glasgow Museums Collection

概要

グラスゴー・ミュージアムズは140万点以上の品々を所蔵しており、そのうち2%未満はいつ訪れても一般公開されていますが、残りの98%はグラスゴー・ミュージアム・リソース・センター (Glasgow Museums Resource Centre/GMRC) に保管されています。GMRCは一般の立ち入り可能な世界水準のミュージアム収蔵庫で、空調管理された17の空間があり、膨大なコレクションの管理と来館者の受け入れのために100人以上のスタッフが働いています。とはいえ誰もが入館できるわけではありません。グラスゴー・ミュージアムズのアウトリーチ部門であるオープン・ミュージアムは、この収蔵庫からコレクションを出して、地元グラスゴーのさまざまなコミュニティのもとに届ける活動をしています。そこには美術館・博物館への訪問ができ

ない人、訪問しない人がいるからです。モノとは何でしょうか？ — 私たち自身の延長であり、私たちそのものでもあり、私たちがどんな存在になりたいと望み、世界をどう捉え

“自分自身の人生やその物語、また他の人の人生や物語に接する機会が必要なのです。共感や思いやりを育むことができるからです。

好奇心や創造性、芸術を通して、「人間であること」を改めて経験したり、熟考したりすることができるのです”

コミュニティ・キュレーター

ているかの表わす、そのようなモノとはなんでしょう？ この事例研究では、特定のコレクションの解釈に限っては、ミュージアムのキュレーターよりも、当事者のほうがふさわしい場合が多いという点を考察したいと思います。

「Art Extraordinary (超アート)」について

「Art Extraordinary (超アート)」はスコットランドのいわゆる「アウトサイダー・アート」のユニークなコレクションで、ペンで描いたスケッチから粘土の彫像までさまざまなものが含まれています。コレクションに含まれるアーティストの大半は正式な美術教育を受けておらず、周縁化された、心の病で入院していたり、治療やケアを受けた人々です。このコレクションは、スコットランド初の芸術療法士で芸術とメンタルヘルスの領域における先駆者であるジョイス・レインから、2012年にグラスゴー美術館・博物館に寄贈されました。ジョイスは病院や刑務所で収集した作品や、教え子や友人から贈られた作品など、キャリアを通して1000点以上におよぶコレクションを築きました。彼女は、タクシー運転手や病院スタッフとたまたま話したり、病院の敷地内やゴミ箱を漁ることが発見につながり、まったく予想もしない場所で非常に驚くべき芸術作品と出会ったといいます。こうした経緯からわかるとおり、作品それぞれの制作背景や来歴はほとんどわかっていません。ミュージアムのキュレーターは、このように奥深く、しかし知り得ない背景を持つ作品をどうすれば解釈できるのでしょうか？

私は、スコットランド史のキュレーターであるトニー・ルイス博士の紹介で、メンタルヘルスや精神疾患に関する地理学を研究しているグラスゴー大学のシェリル・マクギーチャン博士と出会いました。このパートナーシップを通じて、さまざまな力強い組織や情熱ある人々と10年以上にわたって協力関係を結ぶことになりました。専門知識、技術、知見を共有するプラットフォーム作りのために協力してきたのです。最初に取り組んだのは現代的な文脈におけるコレクションの活用についてであり、芸術とメンタルヘルスにまつわる考察を行いました。情報に基づき倫理的に正しい方法で作品を解釈するには、精神疾患の当事者や医療提供者と共に取り組むことが必要でした。

そこでコレクションをミュージアムの外へ持ち出すことにしました。館の外に出て、時間、空間、文脈などが異なる場所で、この社会を生きる人々の心に響くような物語を見つけたいと考えたのです。コレクションはどのような普遍的な会話を引き起こすでしょうか？ やかんの形をした風変わりな宇宙船や、刺繍が施された病院の枕カバーは、いかに感情や経験に訴えかけるのでしょうか？ このような議論がきっかけとなり、最初の本格的な取り組みが始まりました。グラスゴー南部のポロック・シビック・レルムで1年間開催した展覧会「Art Extraordinary (超アート)」と各種イベントプログラムです。

“私たちのコラボレーションの本質は、コミュニティや個人と協力してコレクションを探求することにあります。メンタルヘルスや精神疾患の経験、閉鎖された場所で生活した経験についての理解を深めるために、また創造性がいかにケアや理解、社会的公正をもたらす場を作り出す力を持っているかをより深く理解するために、コレクションを活用する取り組みに私たちは情熱を注いでいるのです。私たちは、ジョイス・レイン氏のクリエイティブな実践の力と、社会の周縁化された人々の声に耳を傾け学び、それを表現しようとする彼女のインスピレーション溢れる試みに支えられています。”

シェリル・マクギーチャン博士

この展覧会のキュレーションは、レバーンデール病院レクリエーション・セラピー病棟の患者とプロジェクト・アビリティのアーティストが行いました。また、バーリニー刑務所の受刑者とも共同で、当館初のハンズオン体験キットをキュレーションしました。キットには芸術作品が入っており、さまざまなコミュニティに当館の所蔵作品を届けられるようになったのです。それぞれのコミュニティの人々が、所蔵品の取り扱いから予防的保存、アーカイブ調査、展覧会の説明文執筆まで、キュレーションや研究に関する基本的なスキルを学びました。一方で当館はこの取り組みを通して、メンタルヘルスや精神疾患の経験に基づく芸術作品について新たな洞察を得ることができました。また、こうした作品が一般に「難しい」とされるテーマについての議論の場に活用できるのかについても理解を深めました。

アウトサイダー・アート？

当館はグループ・ディスカッション、セミナー、イベントを行ううちに、「アウトサイダー・アート」という言葉から活発な議論が生まれることに気づきました。様々な考えが絡まり合っ「アウトサイダー・アーティスト」という概念を構成しています。この言葉は「内側にいる人々」と「外側にいる人々」との間に境界線を引いて、どこに誰が属しているかという枠組みを押し付けるものであるため、問題となる可能性があるのです。またこの人為的な境界線は、「内側にいる人々」が「外側にいる人々(アウトサイダー)」が作ったアート」を収集、展示している意図は何なのか、という疑問を生じさせます。現在このコレクションの管理者である当館にとって、こうした一連の疑問はとりわけ核心を突くものといえます。

“こうした状況下での作品収集は、
主流の文化の枠外で
生み出されるアートとの関わりから、
これまで「アウトサイダー・アート」あるいは
「アール・ブリュット」と呼ばれてきました。
しかしジョイスはそうしたレッテルは
不適切だと考え、よりポジティブな表現
「Art Extraordinary (超アート)」を
好んで使いました。そうした作品を人に見せると
「That's Extraordinary! (これは超すごい!)」と
言われることが多かったので、
この言葉を選んだのです”

プロジェクト・アビリティの展覧会における解説文 2018年

ミュージアムの重要なマイルストーン

当館はさまざまなコラボレーション事業は、イベント、学術論文、新規コレクションの情報、収蔵庫でのコレクション・ツアーやトークなど多岐にわたる一般向けプログラムの実現へと繋がっていきました。「Art Extraordinary (超アート)」の初めての常設展は2022年7月に開幕しました。これはグラスゴーのケルビングローブ美術館・博物館で初のコミュニティ企画による常設展示となりました。

“この展覧会は重要なマイルストーンです。
コレクションを集め始めてから
現在に至るまで10年かかりました。
メンタルヘルスに関するアートやケアの重要性が、
ついにこの権威ある公共の場で正式に
認められたのです。展示ケースは、建物の東ウイング
「エクスプレッション」エリアにあり、
芸術や言葉を通して自己表現してきた人々を
紹介しています。
来館者が友人や家族、そしてもちろんスタッフと共に
考えたり話し合うテーマとなるよう、
メンタルヘルスを提示しているのです”

トニー・ルイス博士

このプロジェクトは当初の予想を遥かに超えて成長し、博物館の外へと大きく展開しました。レバーンデール病院のアーティストたちは、そうしたなかで得た気づきをもとに作品を制作し、2019年に開催されたスコットランド・メンタルヘルス芸術祭に出品しました。またプロジェクト・アビリティは、国営宝くじ遺産基金による「アウトサイダー・アート」研究のイギリス全土への拡大を成し遂げ、2020年1月にプロジェクト・アビリティ・ギャラリーで展覧会「Extraordinary Responses (超応答)」を実現させました。イギリス全土にロックダウンが敷かれたのはその数ヶ月後です。パンデミックの状況は、人々が互いにつながり、ともに働くうえで代替的な方法を探求する機会となりました。社会の主流を占める特権的な人々が外出できなくなったことにより、代替的な方法が一般的になったのです。当館ではそうした試みのひとつとして、ロックダウン中にコミュニティ・グループとオンラインでつながるための「Art Extraordinary (超アート)」箱入りポストカードセットを作成し、病院や刑務所、孤立している人々のもとに郵送しました。

誰もがいわゆる「平常」に戻りたいと願うわけではありません。当館が現在行っているオンライン・プロジェクトでは、受賞歴のある慈善団体アウトサイド・インとの連携で「Art Extraordinary (超アート)」の取り組みを発展させ、オンラインと対面のどちらでも参加できる体制を維持しようと呼びかけています。主にZoomで開催したコースでは、2022年1月にデジタル展覧会を実現させ、2022年8月には、期間限定の展覧会「Unlocking the Extraordinary (非凡さを解き放つ)」をケルビングローブ美術館・博物館とプロジェクト・アビリティ・ギャラリーの2会場で開催予定です。キュレーションの権力を当事者に渡すことで、人々がコレクションに関わる新たな方法が生まれました。当館は千点以上の作品を所蔵する宝庫であり、今後どんな物語が紡がれていくのかは誰にも予想できません。

ホルバーン美術館 Pathways to Wellbeing (ウェルビーイングへの道)

ルイズ・チャンピオン 著



「Museums Inspire! (ミュージアムでひらめき!)」2021年にホルバーン美術館でバース大学の学生向けに開催された、創造性とウェルビーイングのためのプログラム
写真提供: ホルバーン美術館

概要

ホルバーン美術館は、小規模ながら全国的に評価されている独立型の美術館です。1882年にバースで初めての美術館として設立され、ウィリアム・ホルバーン卿(1793-1874)が集めた作品を所蔵しています。2011年に、建築家エリック・パリーが設計した新たな展示室と庭園カフェの美しい空間が加わり、この増築は建築賞を受賞しました。ミニチュア肖像画、ルネサンス様式のブロンズ像、陶磁器、銀器、刺繍などを展示しており、特に18世紀イギリス肖像画のコレクションが有名です。近年では、この地域で現代美術を展示するという新しい構想のもと、国際的なアーティストも含め、以前にも増して多彩な展示プログラムを

行っています。年間来館者は9万人を超え、美術館会員は1000人、ボランティアは300人にのぼります。建物は、ジョージアン様式のバースの建築史のなかでも重要な第1級指定建築物で、シドニー・プレジャー・ガーデンの入り口に位置しています。

人々の心の健康とウェルビーイングを支援する当館の長年の取り組みについて、2019年の当館の展望では次のように表明しています。

「ホルバーン美術館はあらゆる人々を歓迎し、利用しやすく、インスピレーションを与えたり、力づけたりする場所となることを目指しています。この展望の核となっているの

は、芸術や創造性と、社会的・個人的なウェルビーイングとの強い結びつきです。」

2007年に当館のラーニングチームが周辺の公園でホームレスの人々と初めて協働し、それ以降「創造性がいかに心の健康を促進するか」は当館の職員やボランティア、役員に周知され、受け入れられるようになりました。その思いは、当館のスローガン「アートを通じて生を変える」にも反映されています。過去15年間にわたり、創作体験を支援するプログラム「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」を運営、管理、拡充し、ケアの精神を発展、浸透させてきました。最近実施された「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」プログラムは、第三者評価で「美術館内で文化的な変革を起こした」と評価されています²⁸。

「Pathways to Wellbeing (ウェルビーイングへの道)」

「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」は美術館を拠点とする地域参加型プログラムで、当館が主導し、2人編成のチームが管理運営を担当しています。この取り組みを通して、心の不調や社会的孤立の経験がある人が地域の文化遺産や創造的な芸術活動へ参加できるよう促しており、メンタルヘルスやウェルビーイングに大きな改善をもたらしています。当館はパースにあるミュージアム数館と連携して、社会的に見過ごされてきた人々に、地元の文化遺産や視覚芸術に触れたり、創作活動を行う機会を提供することを目指しており、その人々の中には、ミュージアムに行く習慣がない人のほか、有料のアートコースを受講することができない人、専門家の指導やメンターからの助言を受けることができない人、支援グループへの参加ができない状態におかれている人などが含まれます。多様なグループ・プログラムを年間にわたって定期的に開催しており、参加者には心動かされる企画展や常設展の鑑賞、ソーシャリー・エンゲージド・アートのプロのアーティストや美術館のメンターとの交流といった機会のほか、高品質の画材や道具をすべて無料で提供しています。

プログラムの目的は、メンタルヘルスの困難を共有している参加者たちが、当館の建物や歴史的な所蔵品に刺激を受け、楽しく自由に創作活動に没頭することができるように、断定的な評価を下されることのない安心できる空間を提供することです。芸術療法は行っていませんが、創造性をもたらす癒やしの効果を認識して実施しているのです。

“アート(および創作仲間)には、
ストレスに対処する気晴らしや
リラクソスの効果があることに気づきました。
プログラムを通して実用的な
制作技術を学ぶことができたので、
心が不安定になった時には、
それを応用して作品を作っています”

2021年に開催されたプログラム
「Museums Inspire!(ミュージアムでひらめき!)」²⁹の参加者

過去3年間(2019-2022年)で900人以上が当館の創作プログラムに参加しました。280回もの対面セッションを実施し、ロックダウンによる活動制限下ではオンライン・セッションに切り替えて実施しました。コレクションから着想を得て、ダウンロード可能な活動を36種類作成し、美術館を「開館」状態に保ったのです。また、少人数の若者グループとリモートで連携し、「Create@Home(家で作ろう)」と題した「ロックダウン用」のアートボックス580個と付属の手引書を共同制作し、地域の学校や支援団体、児童青年向けメンタルヘルス・チームを通じて、若者に配布しました。

参加者から寄せられた感想は、この活動が孤独感と闘ううえで役立ち、気晴らしや楽しみとなり、不安を軽減するといった好意的なものでした。6週間以上活動に参加して評価調査に協力した参加者のうち73%が「参加したことで自分のウェルビーイングや生活の質に良い変化があったか」という設問に5または6をつけました(評価スコアは「非常にそう思わない」から「非常にそう思う」までの1から6の6段階)。また、参加者の出席率が高かったことから、人々がこの活動に価値や効果を感じていたことがわかります。

28 『未来の美術館:所蔵品のみならず地域社会もケアする』独立評価機関 メアリー・ライアン著 2022年

29 「Museums Inspire!(ミュージアムでひらめき!)」はパース大学の委託事業で、同大学のウェルフェア・サービスが支援する学生を対象とした取り組みです。



「ディスカバー・ミュージアムズ」コースにおけるミュージアムのメンターと、その指導を受けた人々の祝賀会 ホルバーン美術館 2022年
写真提供: ホルバーン美術館

“12週間前に活動を始めた頃の私と、
今の私はまるで別人です。
変わったと感ずるのです。
活動の内容や作品作りに夢中になることで、
不安な気持ちを忘れることができました。
まるで違う人間になったようです。
グループの皆から温かく受け入れられており、
プレッシャーはなく、
純粋に支えられていると感じます”

「Fresh Art@(新鮮なアート)」プロジェクト³⁰の参加者
2022年

このプログラムは、人々がより自立した状態になれるよう、段階的な発展の道筋を示すべく進化してきました。「専門家から支援してもらうグループ」に入ることから始めて、やがて「参加者が互いに協力して活動するグループ」に参加できるようにしたり、「メンターによる支援を受けていた」人が、やがて「ボランティア・コミュニティに参加」する人になるような機会を提供しているのです。変化はゆっくりと起きるということ、また信頼関係を築くには時間がかかるということを理解しているため、当館は長期的な取り組みを行っており、参加者は1年以上にわたって定期的に活動し、さまざまなグループを経て成長していきます。

「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」プログラムは公的機関からの委託事業ではないものの、バースおよび北東サマセット地域のメンタルヘルス支援の根幹を担うサービスとなっており、この地域の社会的処方³¹の提供者やメンタルヘルス関連事業者、地域の支援団体の利用者からの照会も受け付けています。また個人的に直接問い合わせさせていただくことも可能です。希望者が確実に参加できるよう、当館はバース・マインド、クリエイティブ・ワークス、メンタリング・プラス、アヴォン&ウィルトシャー・メンタルヘルスNHSパートナーシップ・トラストなど数多くの団体と連携しています。

「サービス」として始まったこのプログラムは、美術館職員や指導者のアーティスト、ボランティアの間における従来型の上下関係を取り払いました。今では創造的なコミュニティになっています。例えば当館の展覧会「People Make Museums(人々が作る美術館)」(2022年)では、グループの参加者、プロのアーティスト、美術館のボランティアが各自制作した彫刻を並べて展示しました。作品に表現されていたのは、美術館の空間や展示品から喚起された、つかの間の会話、突然の啓示、胸に秘めた思い、感覚、感情などであり、当館のコレクションを称えたり、挑戦したり、再活性化するような物語や記憶、ものの見方を提示するものでした。

ミュージアムやギャラリーが以前にも増してその事業目的や社会的機能、社会的関わりについて再考している昨今にあって、この展覧会は、どのようにすればミュージアムが歴史ある品々だけでなく、人間そのものや、人々のアイデアや創造性をもケアする場となることができるかについて取り上げるものでした。

今後の展開

当館では今後も、こうしたユニークな活動の場を提供していきたいと考えています。なぜなら、こうした取り組みが心の健康や回復をサポートし、社会的な孤立を減らす効果があることに加え、美術館への新たな意見をもたらし、多様な人々の来館を促すきっかけとなり、当館がさらに豊かな場所となることにつながるからです。それによって当館の文化や議論に変化が生まれ、ひいては美術館とは何か、どのような場所になり得るのかという論点に対する私たち自身の意見も変容していくのです。

ルイズ・チャンピオン (ホルバーン美術館(バース)「Pathways to Wellbeing (ウェルビーイングへの道)」プロジェクト・マネージャー、ラーニング&エンゲージメント主任担当)

www.holburne.org/learning/community-engagement/pathways-to-wellbeing

30 「Fresh Art@(新鮮なアート)」プロジェクトは、バース・ミュージアム・パートナーシップ、クリエイティビティ・ワークス、アヴォン&ウィルトシャー・メンタルヘルス・トラスト、バース・マインドによる連携事業です。

リーズ美術館・博物館 Open Minds (心を開く)

エスター・アミス=ヒューズ 著



リーズ美術館・博物館の若者ボランティアによる展覧会「Open Minds (心を開く)」、プリザーバティブ・パーティー (保存の党)

概要

リーズ美術館・博物館は、地方自治体が運営するイギリス北部にあるミュージアムで、テーマも立地も異なる次の9施設からなります。美術館、市立博物館、2棟のカントリーハウス、2箇所の産業遺産、シトー修道院、社会史博物館、そして立ち入り可能な収蔵庫です。9施設すべてで地域社会や若者に向けた活動が実施されており、この事例研究では、そのうちリーズ市立博物館で若者ボランティア団体(プリザーバティブ・パーティー)が運営するプロジェクト「Open Minds (心を開く)」を紹介します。

当館のコミュニティ・チームは近年、人々のウェルビーイングに寄与する取り組みに力を入れ、ミュージアムやギャラリーとの関わりが人々にもたらす良い影響を周知することに努めてきました。当館は、社会的処方を通して参加者を受け入れているハイパーク・ソースと連携して2つのガー

デニンググループを運営しているほか、カークストール修道院でのマインドフルネス・セッション、ウォーキング・イベント、マインドフルネス・フェスティバルを開催しています。ただ、この事例研究で紹介する「Open Minds (心を開く)」プロジェクトはそれらとは少し異なるもので、それらは、私たちがあまり肯定的には認識してこなかったメンタルヘルスやその歴史について考察する試みです。

「Open Minds (心を開く)」

2019年の企画会議の中で、当館の若者ボランティア・グループであるプリザーバティブ・パーティーのメンバーの一人が、メンタルヘルスに対する否定的な態度が彼らの活動に与えた影響について語ったことがありました。そして、そうしたテーマで展示できれば、タブーを打ち壊し、オープンな対話を促す一助になるだろうと力強く情熱的に主張したのです。

“メンタルヘルスに関するものが
ひとつのコーナーに数多く展示されているのを
見て感激しました。(中略)
アンディーズ・マン・クラブのチラシまで
あったのです！素晴らしい展示でした！”

来館者によるソーシャル・メディアへの投稿

彼らは、不安やトラウマを誘発する刺激とならないよう配慮しながらも、率直で挑戦的な展示を作り上げるために議論を重ねました。またこの展示において、彼ら自身に身近なテーマを題材にし、ごく個人的な視点からキュレーションすることにも取り組みました。メンバーのうち数人は、現代のメンタルヘルスの問題に関する品々やテーマを扱う展示を準備することで自分自身が精神的につらくなることを避けたいと考え、代わりに、地域の精神科病院やメンタルヘルスの歴史に関する資料調査に力を注ぎました。一方で、軍務や救急業務におけるメンタルヘルス(トラウマの事例)、ボディ・イメージ(自分の身体に対して抱くイメージ)、心の健康とジェンダーやセクシュアリティの関係性といった事柄を掘り下げたいと考えるメンバーもいました。グループとしては、視覚的な展示としてキュレーションすることは困難かもしれないが、それでも言葉と対話をテーマにすべきだという強い意志があり、最終的にはメンタルヘルス関連の言葉の意味を書いたラベルを貼った薬瓶を並べ、考察を促すような展示を作り上げました。

しかし展示がオープンする2か月前にイギリス全土に最初のロックダウンが敷かれ、すべてのプロジェクトが中止されることになりました。これはグループのメンバーたちの精神的なウェルビーイングに対して大きな影響を及ぼしました。彼らは心を安定させるためのアイデア(ペット、本、ポッドキャスト、パンや焼き菓子作りなど)をソーシャル・メディアに投稿し始めました。さらに「ボディ・イメージ」と「孤立」をテーマにアニメーションを制作し、自分たちで音声録音も行ってWhatsAppで共有しました。

このプロジェクトで最も苦労したのは、ロックダウンということ、そして誰もが精神的につらかった時期に、誰も見ることのないであろうメンタルヘルスに関するプロジェクトに取り組んでいるという皮肉な状況でした。私はロックダウンが始まる前から、こうした重いテーマを扱うことはグループに大きな負荷をかけることになるだろうと懸念していました。しかしメンバーは、このプロジェクトに大きなエネルギーを注ぎ、アーカイブのなかから見つけ出したかつて精神科病院に閉じ込められていた人々の声を伝えたいという強い

思いを抱いていました。そうすることが自分たちに与えられた責任であるとともに、光栄なことだとも考えるようになっていったのです。私は今回のプロジェクト開始時に、参加者がメンタルヘルスの研修を受けられるよう手配しましたが、今後こうしたプロジェクトを実施する際には、さらに充実した支援体制を整えるつもりです。

グループでは当初、複数の支援グループと連携してさまざまなコミュニティの声を展示に反映させたいと考えていました。ロックダウンの直前には地域のリカバリー・カレッジというグループとのミーティングが実現し、他のいくつかの関連グループとのミーティングも予定していました。職員もボランティアの若者たちも、それらが中止になってしまったことを残念に思っています。最終的にはこうした他団体との連携は、心の不調を抱える人々とボランティアの若者たちとの対話を通してではなく、私を含む専門家を通して実現に至りました。また若者ボランティアグループは、ソーシャル・メディアのアカウントを使って検討事項(例えば、ボディ・イメージに関する事例に鏡を用意すべきか否か、など)について話し合い、また、様々なサポート・グループの連絡先やウェブサイトの情報を熱心に収集し、大きな支援用パネル「Where to Go(どこへ行くべきか)」を制作しました。

“ロックダウン中に目的を持てたことは、
精神的な助けになりました。私たちの展示や
ソーシャル・メディアでの活動、映像作品が、
他のメンタルヘルスに不調を抱える人
にとっても助けとなれば嬉しいです。私たちは、
メンタルヘルスについての対話を始めることで、
偏見や差別を減らしたいと考えています”

プリザーバティブ・パーティーから寄せられた感想

今後の展開

このプロジェクトはプリザーバティブ・パーティーのグループに、自分たちにとって非常に重要な事柄について、挑戦的な展示をキュレーションする自由を与えてくれたのだと思います。彼らが企画する次の展示は、歴史の中で見過ごされてきた人々の声がテーマで、「Open Minds(心を開く)」展で取り上げることができなかった声もいくつか紹介する予定です。また、今回の取り組みを通して、こうしたプロジェクトはボランティアだけでなく職員にとっても感情的な負担となり得るということを、皆が深く意識するようになりました。今後のプロジェクトでは、重いテーマの展示を安心して実施するため、場所と時間をしっかりと確保したいと考えています。

ザ・ライトボックス (ウォキング)

ヘザー・トーマス 著



ザ・ライトボックス(ウォキング)の「Open Mind(心を開く)」ツアー
Photo © The Lightbox

概要

イングランド南東部の魅力的なミュージアムやギャラリーのなかのひとつであるウォキング地区のザ・ライトボックスは、企画展プログラムのほか、イングラム・コレクションやヘリテージ・コレクションといった豊かな鑑賞体験を提供する所蔵品のコレクション展を開催しています。また、世界で活躍するアーティストや地元のアーティストを招聘し、トーク、ツアー、交流会、そしてあらゆる年代に向けたアートや工芸のワークショップといった多様な文化プログラムも実施しています。なかでも定評あるプログラム「Art and Wellbeing(アートとウェルビーイング)」では、普段はアートや文化遺産に関わる機会を持っていない事情がある人に向けて、創造的で癒し効果のあるワークショップを提供しています。

ウォキング地区は若者の人口が多く(若年層の割合は21.6%で、イングランド全体の19.2%に比べて高い)急速な成長を遂げている地区です。またサリー州のなかで最も多様性が高く、住民の10%は英語を話せません。パキスタン人の大きなコミュニティがあり、イングランド南東部で最大のシリア難民再定住地でもあります。住民の58%が自分の心の健康に関心を持っており、これはサリー州全体の平均と比べて11%高い割合です。また、この地区の高齢者の40%が低収入に苦しんでいます。

当館は「アートには良い気分をもたらす力がある」という考えに基づく理念を掲げ、あらゆる人のもとにアートを届けるため情熱的に取り組んでいます。「Art and Wellbeing(アートとウェルビーイング)」プログラムでは、認知症患者とその介護者、メンタルヘルスの問題の当事者、地元の介

護施設やホスピスの利用者、さらにはヨーク・ロード・プロジェクトのホームレス保護施設やリンカブルなどの団体の利用者を対象として、無料のコミュニティ・ワークショップを実施しています。

当館は長年にわたって心の不調を抱える人々と協働し、来館者や地域のメンタルヘルス関連団体向けに、芸術関連の学びの機会を提供してきました。展示されている芸術作品であっても、あるいは館内の品々であっても、じっくりと見て関わりを持ち、学ぶことを通して、いかに穏やかな気持ちや幸福感が得られるかを常に重視しています。

当館は2007年の設立・開館以来、数多くの団体とパートナーシップを結び、多彩なプロジェクトを実施してきました。そのひとつである2012年に始まったヨーク・ロード・プロジェクトとのコラボレーションでは、ホームレスの人々に創作ワークショップを提供しています。また、ヤングケアラー(ケアを要する家族のために家事や介護を日常的に行い、子供らしい生活を送れない子供)を対象とした取り組みでは、創作活動を通じてウェルビーイングの向上を促しています。

「Open Mind (心を開く)」ツアー

現在当館が行っているプロジェクトのひとつ「Open Mind (心を開く)」では、カタリスト(この地域では旧称マインド)と連携して、毎月、開催中の展覧会でくつろげる鑑賞ツアーを実施しています。月ごとに異なる芸術作品を鑑賞し、アーティストの人生について参加者が意見を交わす包摂的な参加型ツアーです。カタリストのスタッフやボランティアと揺るぎない協力関係を築くことで、参加者がいつ来館しても当館からのサポートを感じられる体制を整えています。来館した際には、アーティストや地域の文化遺産について深く学び、新たな気づきや知識を得たり、他の人々と交流したりすることができます。また、ツアーの開催日以外でも好きな時に訪れることができるため、何らかの苦しい状況に陥った時にも躊躇せず来館し、私たちとのつながりを実感することができます。

当館が実施する様々なプログラムの改善に向けた取り組みの中でも、事業評価は継続して改良が重ねられてきた取

り組みです。さまざまな評価モデルを適用できるよう、定期的に参加者との対話の場を設けてきました。また評価モデル自体も参加者のニーズに応じて長年かけて改善してきました。調査結果によれば、参加後の評価記入時には満足感がそれほど高くなくても、活動を振り返る頃のデータでは参加者の気分が向上したことがわかっています。「Open Mind(心を開く)」ツアーでは、2回目の参加者の80%が常連メンバーとなり、残りの20%の人々も都合がつく場合には再び参加しています。大半の参加者は、セッションに参加した当日の幸福感が少し向上(10-30%)しますが、心の不調には複雑なケースが多いことを鑑みれば想像できるとおり、多くの場合ばらつきがあります。

“「Open Mind(心を開く)」のセッションには、
内向きにもっている人を
外へと引っ張り出す力があります。
幸福感や活気にあふれ、
地域に密着した健康的な活動です。
アートは人々を結びつけ、人々の内側に
あるものに火をつけます。(中略)こうした旅路では
会話が不足することはありません。
人々は一度動き出せば止まることはないのです!
アートは現実的にも意識的にも
何かを引き起こします。
人々を刺激するのです”

今後の展開

当館は、アートとウェルビーイングに関するプログラムを通じて確固たる実績を築いており、今後もこうした取り組みに力を入れていきます。将来の展望としては、成長を続け、これまでの取り組みを拡大するために資金を確保することや、より多くの組織と協働し、個人やグループを対象とした創作表現の機会を増やしていくことなどを考えています。健康で幸せに生きるための方法を探している人々に手を差し伸べることを、活動の主軸にしたいと考えています。

スコットランド国立美術館： Rowan Alba CARDS arts (ローワン・アルバ・カード・アーツ)

シオバーン・マッコナッキー 著

概要

スコットランド国立美術館(NGS)は、スコットランドの国家コレクションと国際的な芸術作品の保管、収集、研究、展示を行っています。エディンバラに位置し、館内やオンライン、地域でのさまざまなプログラムを通じて、できる限り多様な人と関わることを目指しており、アートおよび、アートが生み出す感動やひらめき、そしてあらゆる年代や背景を持つ人々とのつながりを非常に大切にしています。また、類いまれな質と多様性を誇るコレクションを所蔵し、それを誰もが個々の目的のために各自の方法で利用できる国家資源であると考えています。

当館のラーニング・プログラムに参加することがもたらすウェルビーイングへの効果は参加者の評価から分かっており、その効果は人によって様々であるものの、プログラム参加者の多くに気分の改善が見られるのは確かです。これを受けて当館では、そうしたプログラムを含む来館者へのサービスを通して、人々の健康とウェルビーイングをサポートする仕事にさらに注力するようになりました。当館が戦略的な優先事項に掲げているのは人々のウェルビーイングです。ラーニングとエンゲージメントの担当部局では、すべてのプログラムにおいて健康とウェルビーイングを考慮し、ウェルビーイングのための5要素(つながる、気づく、与える、活動的に過ごす、学ぶ)を活動に組み込み、医療提供者との共同事業を行っています。

「Rowan Alba CARDS arts (ローワン・アルバ・カード・アーツ)」プログラム

2013年以降、当館はホームレス支援を行う慈善団体ローワン・アルバと協働していますが、その事業内容は過去数年間で変化してきました。当初は記録の手段として写真を使う単発のプロジェクトでしたが、その後、ローワン・アルバによる仲間作り支援のボランティア・サービス「CARDS: Community Alcohol Related Damage Service(コミュ

ニティのアルコール関連被害支援)」と協働し、アーティストが主導してさまざまな芸術の形を探索する月ごとの定期的なセッションになりました。CARDSとは、アルコールに関連した被害の経験を持つ約100人の参加者に心の健康と社会的なつながりを提供する支援団体です。

ローワン・アルバの報告によれば、パンデミック以降、参加者のウェルビーイングは平時と比べてずっと低くなり、この期間にメンタルヘルスの支援を受けた人はひとりもいなかったということです。



ギャヴィン作《ボトルのなかの男》
写真提供：スコットランド国立美術館

ほとんどの参加者は、当館のプログラムに参加するまでは来館したことがないか、あるいは健康状態の悪化により来館しなくなっていた人々でした。ロックダウン中、アーティストによるセッションはオンラインで行われ、アーティストのサム・ラザフォードがこのグループのために一連のZoomセッションを主導しました。以前は館内で開催していた芸術の表現手段を探求する活動を、オンラインに切り替えて継続したのです。これは、グループ内の結びつきを保ち、参加者各自の作品を見せ合う機会となりました。その後、ロックダウンの制限が緩和されると、スコットランド国立肖像画美術館で対面セッションを再開しました。セッションでは毎回、まず参加者とボランティアが学習室で顔を合わせ、その後、展覧会を鑑賞し、それから学習室に戻って創作活動を行います。簡単な昼食が用意され、余った食べ物は持ち帰ることができます。

“階段を上って行った時、ある男性が私のためにドアを開けてくれたのですが、私は辺りを見回してしまいました。きっと誰か他の人が背後いるのだろうと思ったのです。彼は私に微笑みかけて、さようならと声をかけてくれました。その後、煙草を吸いに外に出た時に、2人で話しました。素敵な人で、知識が豊富でした。もしかしたら、ひとりでもまた足を運ぶかもしれません。知り合いがいると参加しやすいのです”

参加者

このプログラムが参加者にもたらす恩恵は多岐にわたり、広範に及びます。まずは、参加するために起きて外出しようという気持ちになり、人とのつながりが生まれます。また創作活動には予め決められた期間もなく、断定的に評価されることもありません。良い刺激を得られて、安心感があり、食事も提供されるのです。肖像画美術館の立地も功を奏しています。街の中心にあるため、参加者は地元を離れてバスに乗り、中心街まで来ることになるのです。彼らは中心街を、観光客や富裕層といった自分とは異なる人々が集まる場所だと思っていることが多く、あまり来ることがありません。そんな彼らが中心街の肖像画美術館を訪れることで、自分もこの街の一員なのだという感覚を取り戻すことができます。

ローワン・アルバによれば、館周辺は環境が良く、CARDSグループの開催場所にふさわしい以下のような条件が揃っています。入場が無料で、バスを使って楽に来館でき、屋内にあり、大きなエレベーターや車椅子で移動しやすい通路が



コンスタンティン作「風景」

写真提供：スコットランド国立美術館

あり、清潔で利用しやすいトイレがあること。時間的な制約がなく、参加者を少人数に分割して別の場所に移動することが常に自由で(制約が厳しい臨床現場とは真逆)、スムーズな会話を促す視覚的な手がかりがあり、いつどこに行くのかを把握していると感じられること。ボランティアやスタッフの会合場所として利用でき、人が集まるのにふさわしい心浮き立つ美しい空間であり、参加者が知識を共有できる場所であること。そして、必要な時に休憩できる椅子があり、館内は多くの人がいるにも関わらず静かなのです。

“多くの人がいるにも関わらず交流する必要はない—そんな場所が存在するとは思いませんでした”

参加者

アルコール依存症やそれに関連する健康問題に苦しむ人々との取り組みには、いくつかの課題があります。まず、欠席する可能性があることを理解して、断定的な評価を下さず、次の機会にいつでも迎え入れる環境を整えることが大切です。月に1度、定期的にプログラムを行うのはこのような環境を整える上で効果的です。またお酒を飲んでしまった参加者の行動を、参加者自身にも、またグループの他のメンバーにも敬意を払いながら管理することも重要です。こうした支援の実現は、運営スタッフのスキルと経験にかかっています。

“ロックダウン中にプロジェクトに参加したことは素晴らしい経験でした。人々に出会い、写真を撮る場所に意識を集中することができたのです。私はもともと閉じ込めるタイプではありません。写真が一番の趣味になり、写真を撮りに特別な旅行に出かけたいと思うようになりました”

参加者

ローワン・アルバとの提携事業において重要な側面のひとつは、参加者たちの創造性を育み、各々が自分の創造性を追求して自分のものとするよう導くことです。私たちはこの信念を貫くためのひとつの方策として、月に1度、ボランティア向けに、スキル向上のためのプログラムを開催しています。

今後の展開

CARDSプロジェクトの一役を担っていることは当館の誇りであり、参加者の健康面の自己管理を支援できていることを光栄に感じています。今後もこうした取り組みを続け、このグループに一般向けプログラムの開発に参加してもらう機会を探るとともに、館全体にこうした学びを浸透させていきたいと考えています。

ソールズベリー博物館 ウェル・シティ・ソールズベリー

エイミー・ハメット、エマ・ガスコイン 著



「The English Venice (イングランドのヴェネチア)」コースの参加者が博物館の所蔵品を鑑賞・考察したのち、その経験から墨と漂白技法を使って作品を制作する様子。 写真提供：ソールズベリー博物館/ウェル・シティ・ソールズベリー

概要

ウィルトシャー州南部のソールズベリー博物館は、壮麗な大聖堂の向かいに位置しており、ストーンヘンジなどの先史時代の史料、軍人ピット・リバーズが収集したウェセックス・コレクション、そしてオールド・セーラム遺跡とクラレンドン宮殿遺跡および市内各所からの出土品を含む、素晴らしい中世の考古学コレクションを有しています。

近年、国営宝くじ遺産基金が支援するプロジェクト「Past Forward: Salisbury Museum for Future Generations (過去から未来へ: 未来の世代のためのソールズベリー博物館)」を立ちあげ、新たな常設展示室、柔軟に利用できる

学習やイベントの場を整備し、新しい活動や地域への働きかけを行っていく予定です。

当館は2018年にウェセックス・ミュージアム・パートナーシップの一員となって以来、コミュニティ・キュレーターを採用し、地域社会に向けた取り組みを拡大してきました。コミュニティ・キュレーターの役割は、精神面での支援を必要としているケースも含めて、社会的に見過ごされてきた人々など、これまで当館との関わりをもたなかった人々とつながることです。

芸術や文化遺産の心の健康やウェルビーイングに与える効果が徐々に周知され、ミュージアムと社会的処方との関

わりが広がるなかで、ソールズベリー博物館はウェル・シティ・ソールズベリーの一部となり、国営宝くじ遺産基金から3年間のプロジェクト支援を受けるようになりました。

ウェル・シティ・ソールズベリーについて

当館および、ソールズベリー地区病院アートケア、ウェセックス・アーキオロジー、ウィルトシャー・クリエイティブの4団体が連携するプロジェクトが、今から1年前の2021年7月に始まり、創作コースなどのプログラムを通じて、精神的な助けが必要な人々を支援しています。このプロジェクトの軸は“つながり”にあります。芸術とのつながり、文化遺産とのつながり、景観とのつながり、地域社会とのつながり、そして人とのつながりです。

“館内でじっくり発掘されたものを
観察しながら、かつては誰が持っていたのだろう、
どうしてその後失われたのだろうと
考えを巡らせて楽しみました”

参加者

4団体はそれぞれ、地元のアーティストやものづくりをしている人々と連携し、参加者が学びや発見、好奇心を刺激される瞬間を得られるように設計した8週間のコースを年2回実施しています。1回ごとの参加人数は比較的少なく、1コースあたり最大12人に抑えられています。必要なサポートが全員に行き渡るとともに、仲間意識が生まれる人数にしているのです。かかりつけ医、もしくは第三セクターの組織、その他の連携組織から紹介を受ける参加者もいますし、個人で申し込むこともできます。

当館で初めて実施したコースは「The English Venice(イングランドのヴェネチア)」です。参加者は、ソールズベリーに残る中世に作られた排水路からの発掘されたもの(想像するよりはるかに面白い品々です!)を発想の源として活用しながら、ミクストメディア作品(複数の素材・技法を用いて制作された芸術作品)について鑑賞・調査しました。さまざまな手法で出土品を観察するよう促され、その体験をもとに、インク、粘土、グラファイト(黒鉛)、漂白技法などさまざまな画材や技法を用いて各自で作品を制作したのです。

参加者たちはこの場に限りではない友情を築き、これを機に当館や市内で開催される他の集まりや活動にも参加するようになりました。

一方、当館で2番目に開催したコース「Creative Writing for Wellbeing(ウェルビーイングのための文芸創作)」では、2週間ごとに異なるテーマを設定し、所蔵品をじっくりと観察することでインスピレーションを得て、とりわけ作品説明



「The English Venice(イングランドのヴェネチア)」コースの参加者が、所蔵品に着想を得て石膏型を作り、それをもとにミクストメディア作品を制作する様子。

写真提供: ソールズベリー博物館/ウェル・シティ・ソールズベリー

に役立つ文章力を磨くためのさまざまなアクティビティを行いました。そのひとつである当館の舞台裏をめぐるツアーでは、参加者たちがその経験から着想を得て怪談を創作しました。

これらの2つのコースでは、それぞれに新たな課題が生じたため、チームで毎週話し合いを重ね、解決していきました。対応に苦勞した問題のひとつは、出席者数の変動でした。参加者はその時々で、多くはメンタルヘルスに関連する理由により、欠席することがあります。つまり私たちは出席者に合わせて週ごとに内容を調整し、セッションを提供しつつ実施計画を見直していく必要があったのです。

また、スタッフの業務負担を正確に予測できていなかったことも問題でした。このプログラムの実施にともなって、セッションを円滑に進めるための所蔵品の特定や研究に加え、より詳しい情報を求める参加者への対応といった追加業務が発生したのです。セッション以外の時間に行う参加者支援も想定外の仕事でした。

当館のスタッフがこのプロジェクトで最も苦勞したのは、参加者との心の境界線を保つことでした。コース終了時に別れを告げるのは、つらく悲しい経験です。また、参加者のメンタルヘルスにまつわる出来事について自己開示を受けたあとで、スタッフが自分自身のウェルビーイングを保つのに苦勞することもありました。このような際には、当館のプロジェクトチームに対して、外部からの臨床的指導を得ました。これは効果的でした。同様のプロジェクトに関心がある人や、すでに類似のプロジェクトを行っている人には、

こうした外部からのサポート体制を整えることを強く推奨します。

さまざまな課題はあったものの、参加者がこのプロジェクトから得た多大な恩恵を考えれば、十分乗り越える価値がある課題だったと言えるでしょう。下記に、ウェル・シティ・ソールズベリーのコースに参加した人々から寄せられた感想の一部を紹介します。

“このアートクラスで人生が変わりました”

“文章創作コースでの経験が
私の日常生活に何かをもたらし、
参加しなければ本当に空っぽのままだった
心の隙間を埋めてくれました”

“このグループには
とても勇気づけられるような雰囲気があり、
ここにいるととても安心します。(中略)
気持ちが前向きになり、
以前よりも上手くストレスや不安感を
コントロールできるようになりました。”

参加者

当館では、マンチェスター・メトロポリタン大学のパブリック・ヒストリー・センター、および文化遺産マンチェスター・センターに所属する研究者たちとともにプロジェクトの評価を行っています。評価を行った初年度は面白い変遷をたどりました。参加者のウェルビーイングに関して多くの定量的データを収集する一方で、この手法が参加者にマイナスの影響を与えないよう調整を試みたのです。最終的には、ウェルビーイングを測定する尺度の活用にはこだわらず、参加者各自がウェルビーイングに関する自分なりの目標を定められるよう促すことにしました。近い将来、こうして得た初年度の成果を振り返ることを楽しみにしています。

今後の展開

当館では、資金の使用開始から2年目、3年目に進んでいく上で、創作コースへの参加以外の方法でこのプロジェクトに関わりたいと望む人々に、その可能性を示したいと考えています。その方法としては、プロジェクト・パートナーの協力のもと、メンターからの指導を受けながら行う短期、あるいは長期のボランティア活動、個人プロジェクト(当館の所蔵品の調査や、その経験を反映した作品制作、簡単な発表など)、当館が設置している参加者指導グループへの加入などが考えられます。

タウナー・イーストボーン・ギャラリー 「Arts in Mind (心に芸術を)」

クレア・ドブソン、エスター・コリンズ 著

概要

タウナー・イーストボーン・ギャラリーは100年近く前から現代美術の収集・展示を続けており、2020年には芸術基金の最優秀ミュージアム賞に輝きました。毎年17万5000人ほどの来館者を迎え、若手からベテランまで、非常に興味深い活動を行う多様なアーティストに注目し、展覧会、作品収集、作品制作委託などのプログラムを活発に行っています。また気候変動、移住、土地利用や環境といった現代的なテーマを扱った作品も含め、広く風景や環境をテーマとする作品約5000点を所蔵しています。

個人やグループに向けたラーニングや社会参加活動においても、当館は確固たる実績を誇ります。人々の健康とウェルビーイングに対する支援にも常に力を入れており、長年にわたって定期的なグループ・プログラムを館内で行っています。そのひとつが、心の不調を抱える人々に向けた週1回の集まり「Arts in Mind (心に芸術を)」です。当館は地方自治体による支援を補完し、支援を最も必要としている人々に届ける、極めて重要な役割を果たす存在へと成長してきたのです。2019年に、イーストボーン地域の6つの小学校において行なった、多様で複雑な感情的・行動的問題を抱える児童に向けた心を癒すセッションが、この芸術療法プロジェクトの試験的な実施でした。これは間違いなく参加者の重要なニーズに応えるものでしたが、とはいえ専門的な療法士とのパートナーシップなしにこうした専門的な支援を継続するのは難しいことも感じ取られました。当館が重視すべきなのは、参加者が創作活動を追求できるよう促し、各自が心の安定を保てるようサポートすることなのです。こうした姿勢は、プログラムに多様なアーティストを招聘し、さまざまな取り組みを実現していくうえでも役立ちます。

パンデミックの活動休止を機に、メンタルヘルス不調を抱える人々を含め、最も支援を必要としている地域社会とつながり、その場所に根ざしたアプローチで学習や活動に取

り組むという方向性を打ち出しました。そしてパンデミックの時期を通して、さまざまな心の不調を抱え、脆弱な状態にある大人や若者ら540世帯に計2500個の創作用材料キットを配布しました。エンゲージメントに5か年計画「メイキング・トゥギャザー」では、重要な取り組みとして、美術館の中だけでなく美術館の外でも、創造的なプロセスに焦点を当てた参加型実践の公開プログラムを提供し始めています。心の不調を抱えるケースも含めて、年齢層も創作活動の経験も異なる人々を対象としたプロジェクトや、参加を促すきっかけ作りになるプログラムを提供していく予定です。

「Arts in Mind (心に芸術を)」について

当館は2009年以降、心の不調を抱える人々のコミュニティにおいて、ひとつのグループの創作活動を支援してきました。このプロジェクト「Arts in Mind (心に芸術を)」は当初、イーストボーン健康増進委員会の助成金で設立され、サセックス・パートナーシップNHS財団トラスト(メンタル・ウェルビーイング・チーム)のGP(General Practitioner/かかりつけ医)紹介制度を利用して運営されていました。その後2015年に、サセックス・パートナーシップをはじめとするさまざまな仲介機関からの照会を管理するプライベート・サセックス・オークリーフとパートナーシップを結び、アーティストやものづくりに携わる人からなるグループへと発展しました。メンバーは毎週当館でファシリテータ主導のセッションに参加しており、そのうち中心メンバーの約15人は過去12年間、継続的に参加しています。

2018年には、このグループのプログラムに対する当事者意識が高まり、職員の助けを借りずに自主運営する“コレクティブ(運動体)”となりました。しかし、こうした変化は参加者にとっても当館にとっても有益ではないことがすぐに明らかとなり、その年内に、グループのサポート役を担う芸術療法士が採用されました。彼女は自身のクリニックで診



タウンナー・イーストボーン・ギャラリー「Arts in Mind (心に芸術を)」の参加者スティーブン・コッガーの作品 Photo © Mandy Wax

療を行う傍ら、4年間このグループに携わり、その貢献のおかげでパンデミック下を通して参加者同士のつながりを保つことができたのです。

パンデミック下ではメンバーの多くがZoomを使って定期的な集まりを続けました。当館職員も、こうした困難な状況でもくじけないメンバーの胆力に驚き、感銘を受けました。継続的に集まることは、メンバー各自が自分の心の安定を図り、ウェルビーイングを向上させる上で効果的です。

その後、外出制限が緩和されると、彼らはいくつかのプロジェクトに参加しました。そのうち2020年秋に参加した「Pause(休止)」は、「Saving Berwick Church(バーウィック教会保存活動)」の一環として、アーティストのルーシー・ステッガルスのもと8週間にわたって行われたプロジェク

トです。彼らは建物周辺の風景や環境、現代美術との関わり、ブルームズベリー・グループ(20世紀前半に存在したイギリスの知識人や芸術家の集まり)のメンバーが手がけた室内の壁画について学び、またフロッターージュ、マーブリング、ストップモーション・アニメーション(コマ撮りアニメ)などの技術も学びました。さらにグラフィイトやドライ・フラワーなどの素材を取り入れて作品を制作し、パーウィック教会に展示しました。また、2021年秋にはイーストボーン陶芸スタジオでのプロジェクトに参加し、6週間にわたって陶磁器の成形や釉薬がけの技術を学ぶ素晴らしい体験をしました。



タウナー・イーストボーン・ギャラリー「Arts in Mind (心に芸術を)」の参加者ジャネット・マズムダールの作品 Photo © Mandy Wax

これらのセッションの多くで軸となるのは、参加者各自がヴィジュアルアートの創作活動を展開していくことです。毎週新しいことに挑戦できるよう、創作に使う素材や技術、参考資料を取り入れているほか、多くの場合、当館の展覧会の内容と関連性を持たせています。スケッチや絵画といった平面作品を制作することが多く、モノプリント、リノカット、コラージュなども見られます。「Pause (休止)」プロジェクトでは、参加者が個別に作業したり、協力したりしながら、各自の個性や取り組みを結集してアニメーションを共同制作しました。

メンバーが再び対面で集まることができた初回のセッションには、「Arts in Mind (心に芸術を)」に登録しているメンバー全員が出席しました。ロックダウン解除後の最初の6ヶ月間は、ソーシャル・ディスタンスを保つために通常よ

りも広いスペースで共同作業を行ったため、作品の制作方法や内容が大きく変わりました。例えば、自分と等身大の絵を描き、その制作の続きを毎週できるようになったのです。また、当館職員がメンバー各自の長期的な創作活動をサポートしたのも、このときが初めてでした。

長年にわたるこのような取り組みの中で、参加者の中には当館のワークショップやスタジオを通じて「Open Studio (オープンスタジオ/アーティストのアトリエの一般公開)」プログラムに参加したり、「Artist Open House (アーティスト・オープンハウス/アーティストの自宅やアトリエの一般公開)」に加わったり、あるいは当館のギャラリー・アシスタントのボランティアに加わったりする人も出てきており、さらにメンバーのひとりが大学で芸術学を専攻することになった、ということもありました。

当館では近年、このグループのサポート役として2人のアーティストを採用しました。そのうちひとりの役割は、心の不調を抱える大人向けの取り組みに関する全国的な議論の一環として、このプロジェクトを展開させるために、キュレーション的な視点を強化することです。このアーティストはベスレム・ギャラリーの研究リーダーも務めていることから、当館においても安全な仕組みや手順の導入のためのサポートを行い、またプログラムの開発に他組織の知見や専門知識を取り入れていくことが期待されます。もうひとりのアーティストの役割は、素材、なかでも、当館にほど近い南ダウンスで発見された天然素材に着目することです。これにより参加者たちは、地域と関連性のあるオープンで有意義な共同制作として、現代の創作手法との関わりを深めることができるのです。

当館ではこのプロジェクトについての評価を、長年にわたって公式に実施しており、また、参加者からは個別に感想が寄せられてきました。2022年9月にこのグループが再開するのを機に、活動を毎週振り返って考察し、その結果を各セッションに反映する予定です。また、グループのメンバーやアーティストと協力して、今後2年の間に実施するコースを対象として「Most Significant Change (MSC/最も重要な変化)」という評価手法の要素を取り入れる予定です。さらに、このグループは、共同制作から生まれた作品や共同制作への参加を通して感じたことを振り返り、批評するための方策として、パブリック・シェアリング(インスタレーションや展覧会を通じて人々と共有すること)の実施を目指す予定です。

“以前に比べると

感情的に行き詰まるのが少し減り、
アートのおかげで症状の再発に
向き合うことができました。

プロが手がけた芸術作品に囲まれるのは
感動的な体験であり、ここでの活動には
他の場所では得られないような
重要性と重みがあると感じています”

グループの参加者

今後の展開

イーストボーン地域は比較的裕福なコミュニティが多いにも関わらず、英国繁栄指数では360地域中312位と、国内の最貧困地域の上位10%に近い水準です。当館では、パンデミックの直接的な影響として、特に若年層の心のバランスが急激に悪化していることもますます認識されるようになりました。

人々がパンデミックを経て新たな生活習慣に対応し、生活費危機や気候変動といった今後の課題に直面するなかで、支援の必要性が増えている状況に対し、より適切に対応していきたいと考えています。また、2人のアーティストにグループの指導を依頼したことで、今後は「Arts in Mind(心に芸術を)」のメンバーを増やし、作品発表やイベント開催に向けた活動を支援していく予定です。さらに、若者の前向きな心の状態をサポートする新しいプロジェクトも計画しています。その内容は、自分と“風景”との関わりを探求するというもので、おそらく、個人的な感情の風景、家庭の風景、そして地元の南ダウンスの風景などが含まれることになるでしょう。当館は現在、町の高台に広がるダウンランズ地域のブラック・ロビン・ファームに、第2の芸術と文化の拠点の開館準備を進めており、今後数年間にわたって、上記のような新しいプロジェクトを展開していく予定です。ブラック・ロビン・ファームは19世紀に建てられた酪農場で、地域のコミュニティや来館者向けに包摂的な参加型の創作活動を提供したり、アーティストへの作品制作委託の機会の創出を行う場所へと生まれ変わる予定です。

タイン・アンド・ウィア州 アーカイブ博物館

クララ・シールド 著

概要

タイン・アンド・ウィア州アーカイブ博物館(TWAM)は、地域博物館、美術館、およびアーカイブ施設の機能を兼ね備えています。タインサイド地区に点在する9館のミュージアムとギャラリー、そしてタイン・ウェア地域のアーカイブを管理運営しており、アーカイブ、芸術、科学技術、考古学、軍事・社会史、ファッション、自然科学といった領域における国際的に重要なコレクションを所蔵しています。

当館は、タインサイド地区の住民やコミュニティとの協働を通して、創造性と健康やウェルビーイングを結びつける取り組みを専門としています。文化的な活動が健康に与える効果を認識し、医療・介護の専門家、地方自治体、大学、慈善団体、支援サービスと連携して、20年以上前から参加者の心を動かすプログラムを開発してきました。地域社会のニーズを把握するための徹底的な調査に基づいてプログラムを実施しており、イングランド北東地域内の健康上・経済上の格差に心を寄せながら、創造性と健康やウェルビーイングを結び合わせる活動を通して、健康的でウェルビーイングな平等社会の実現を目指しています。

当館の「Wellbeing Programme(ウェルビーイング・プログラム)」は、イングランド内の他の地域に比べて北東地域では心の不調の問題がとりわけ多いことを示す公衆衛生データに基づき(イングランド公衆衛生サービス、2018年)、人々のメンタルヘルスの改善を目指して開発されました。臨床現場での活動から、コミュニティ支援サービスを通じた人々とのつながり、当館が運営するミュージアムやギャラリーの来館者向けの活動など、さまざまな場所に対応し、多様なニーズに応えるプログラムです。

プログラムのハイライト セント・ニコラス病院

ニューカッスル・アポン・タイン地域にあるセント・ニコラス病院は、CNTW(カンブリア州、ノーサンバーランド州、タイン・アンド・ウィア州) NHS財団トラストの傘下であり、12ヘクタールに及ぶ敷地内で、低・中程度の保護体制の成人患者向け法医学サービス、成人向けの応急処置およびリハビリテーション・サービス、中程度の保護体制の子供・若者向けサービス、高齢者向けの専門的な長期介護サービスなど、さまざまな臨床サービスを提供しています。

プログラム1

バンバラ診療所の創作プロジェクト

2019年9月

バンバラ診療所は中規模の保護体制の施設(Medium Secure Unit/MSU)で、治療の対象としているのは、法に抵触したり、他者や患者自身に危害を及ぼす可能性のある、精神疾患やパーソナリティ障がいのある男性患者です。

「Network Programme(人間関係を広げるプログラム)」のリーダー、マイケル・マクヒューはこの診療所で、定期的な集中プログラムを実施しました。週に1度のセッションを12週以上にわたって開催し、毎回4~6人の男性が参加したのです。当診療所やノースゲート病院の芸術プロジェクトのマネージャーが重視したのは、創作することやミュージアムの所蔵品を病棟に持ち込んで展示すること、そして挑戦的かつ革新的な長期的協力関係を築くためのきっかけを作ることでした。

このプログラムは2019年9月に始まり、同年の初冬まで継続的に実施されましたが、その開始後ほどなくして、このグループのメンバーは週ごとに変化するということが明らかとなりました。というのも、外的要因が参加者に影響を与えるケースが多く、例えば、前科のある患者が再び刑

務所に入ったり、臨床治療プログラムの内容や患者の予定が突然変わったり、異なる病棟から来た患者同士が同室にいられないような出来事が起きたりする可能性があったのです。このような状況に対応するため、各セッションの内容は独立したものとして用意し、初めて参加する人でも理解できる内容にすると同時に、定期的に参加している人にとっても連続性を感じられるようにもする必要がありますがありました。

担当した芸術プロジェクトマネージャーは次のように述べています。

「このプロジェクトでは、4つの病棟から患者を招き、議論や討論の場を設けました。各自が自分の意見を持ち、その場に貢献しました。こうした取り組みにおいて診療所内の意欲を高めるうえで、外部の専門家の協力を得ることは非常に有効です。とりわけ時間をかけて関係性を育み、さらなる発展を目指す場合には尚更そうなのです。(中略)このプロジェクトのおかげで、ミュージアムの活動がもたらし得る豊かな可能性に気づくことができました。現代のミュージアムの取り組みに関して多くのことを学び、そうした実践が人々の健康にどれほど寄与し、タイン・アンド・ウィア州アーカイブ博物館と当診療所が、価値観や理念の面でいかに共鳴しているかを理解できたのです。ここで患者と行っている取り組みを支援してくれる、同じ志を持つ仲間や創造的な思索者たちと出会うことができました。このプロジェクトを経験したことは、当診療所にとって、誰もがある程度の関わりを持ち、意味を見いだせるような文化的な活動を試み、実現していくうえでの助けとなりました。患者にとっては、自分の取り組みが大きな力を持ち、能動的に関わりを持てるのだと知ることは、非常に有益なことなのです。この画期的なプロジェクトが今後、記録に残され、芸術や医療の専門家に共有されることを願っています」

“このプロジェクトのおかげで、
ミュージアムの活動がもたらし得る
豊かな可能性に気づくことができました。
(中略)患者にとって、自分の取り組みが
大きな力を持ち、能動的に関わりを持ると
知ることは、非常に有益です。
この画期的なプロジェクトが今後、
記録に残され、芸術や医療の専門家に
共有されることを願っています”

芸術プロジェクトマネージャー

プログラム2

Bede Ward Heritage Project (ベード病棟文化遺産プロジェクト)

2022年3月

ベード病棟は、心の病の再発や危機的状態を経験し、検査や治療を要する18歳以上の男性を対象とした急性期病棟です。

この病棟で行われた「Bede Ward Heritage Project (ベード病棟文化遺産プロジェクト)」は、作業療法士のリーダーから要望を受け、タイン・アンド・ウィア州アーカイブ博物館の「Wellbeing Programme (ウェルビーイング・プログラム)」の一環として、クララ・シールドが考案し実現した取り組みです。このプロジェクトの達成目標には、当館の多様な所蔵品を用いたハンズオン体験セッションと、患者が主導する創造的な作品制作が含まれていました。8週間にわたって実施され、ディスカバリー博物館への訪問も1度行われました。毎回5～8人の男性患者が参加していました。

病棟の作業療法の活動チームと地域のストリート・アーティストの協力のもと、自分自身や自分のアイデンティティにとって文化遺産が持つ意味を探求し、これまで育ち、暮らしてきた地域について考察しました。セッション内容は各グループの興味によって調整し、工学、造船所の開発、鉱業、地域産業、雇用などがテーマとなりました。そしてアーティストと協力しながら、所蔵品やそれまでの対話を総合的に表現した壁画を病棟内に制作しました。壁画の中心には炭坑作業員のランプがひと際目立つように描かれ、「一筋の光明、希望の光」と題されました。患者たちは、彼らが健康を取り戻すうえで、この病棟から希望を与えられていると感じていたのです。

そのほか、タイン・アンド・ウィア州アーカイブ博物館では、職員が患者との取り組みを継続し、患者自身が集めたコレクションを自分でキュレーションする技術を教えるための設備として、陳列棚の設置を進めています。これにより、患者が病棟にいながら活動や対話を行うことが可能となり、症状改善へのサポートになります。

作業療法士のリーダーは、次のように述べています。

「クララと行った共同作業は、患者にとってもスタッフにとっても、非常に意義深い経験になりました。各セッションは多くの患者で賑わい、普段はほとんどイベントに参加しない患者たちでさえ楽しんでいました。とりわけ2人の男性患者が、このプログラムから大きな恩恵を受けました。その1人は、普段は物静かながら時折問題を起こす患者で、こうした集まりにはめったに姿を見せないタイプでしたが、歴史への関心が高く、知識もあることから非常に生き生きとしていました。(中略)

週を経るごとにさらに自信を深め、毎回参加を心待ちにす

るようになりました。(中略) もう1人は、過去に作業療法のセッションに参加したことがありましたが、歴史が好きだということは誰も知りませんでした。(中略) この患者はすべてのセッションに参加したのち、クララのアシスタントになりました。(中略) 自信をつけていく様子を目の当たりにして、(中略) 私たちも非常にやりがいを感じました。セッションのたびに終始笑顔を見せ、壁画が完成していく様子を嬉しそうに観察し、たびたびアーティストと立ち話をしていたほどです。

このプロジェクトは病棟全体にとって、創作活動の過程を見ることができたというだけでなく、患者と美しい壁画を眺め、話し合うことができたという点で、かけがえのない体験となりました。(中略) 先週、患者たちを連れてディスカバリー博物館に行きました。なかにはミュージアムに行くこと自体が初めてという患者も数人いました。私たちは今後もクララやディスカバリー博物館と協力して陳列棚の設置を進め、この素晴らしい協力関係を続けていきます。

“クララと行った共同作業は、患者にとってもスタッフにとっても、非常に意義深い経験になりました。(中略) このプロジェクトは病棟全体にとって、創作活動の過程を見ることができたというだけでなく、患者と美しい壁画を眺め、話し合うことができたという点で、かけがえのない体験となりました。(中略) 先週、患者たちを連れてディスカバリー博物館に行きました。なかにはミュージアムに行くこと自体が初めてという患者も数人いました”

作業療法士のリーダー

今後の展開

私たちはすでに上述の活動を終了し、現在はウィロー・ビュー病棟でさらなるプロジェクトを実施しています。この病棟の入院患者は、重い精神疾患や複雑なニーズを抱え、集中的なリハビリテーションを必要としている18歳以上の男女です。プロジェクトの実施方法は以前のプログラムを踏襲し、職員や患者の意見や当館スタッフの観察に基づいて各プログラムを調整・改善しています。

調整の内容としては、グループの需要や関心に柔軟に対応すること、予定の計画は1週間先までのみ行うこと、患者の貢献が確実に重んじられ、注目されていると示すために、物や所蔵品に関する要望に応えることなどが挙げられます。そのほか、病棟内の環境や人間関係、参加者が個々に必要とする精神面のサポートや予測できない病棟内の出来事などによって参加者の行動が変化する可能性を考慮し、備えることも調整の一環です。

また、これらの病棟では、入院患者の多くが12週間ほどで退院するため、最終的に何かを作り上げるプログラムの場合には、実施期間を12週間以内とし、患者自身が可能である限りは全行程に参加できるようにすることも必要です。

エディンバラ大学 「Prescribe Culture on Campus (大学構内での文化的処方)」

ルーサンヌ・バクスター 著

概要

「Prescribe Culture(文化的処方)」は、受賞歴もある心の健康と社会的ケア、および人々のウェルビーイングを支援する非臨床型のプログラムで、エディンバラ大学が文化遺産を活用して運営しています。

このプログラムは2018年に、同大学図書館とそのコレクションのエンゲージメント部門のマネージャーであり、文化的処方プログラムのリーダーも務めるルーサンヌ・バクスターによって創設されました。地元のコミュニティ・リンクワーカー(地域住民の相談に応じ、支援サービスなどの社会的リソースを紹介する専門職)の代表、介護施設のマネージャー、大学のGP(General Practitioner/かかりつけ医)、カウンセリング・サービス、学生向けのウェルビーイング支援サービス、学生組合といった、舵取り役を担う一連の組織からサポートを受けています。

現在このプログラムは、国際色豊かで幅広い年代の学生と地域住民に向けて、オンラインと対面を組み合わせ実施しており、利用可能なリソースとしては、オンラインと対面のプログラムがそれぞれ2つずつあります。そのうち、「Take 30 Together Virtual(T30TV/30分間オンラインで集まろう)」プログラムは、孤独や孤立に悩む18歳以上のあらゆる人を対象としており、医師などの照会なく自己判断で申し込むことができます。同じく個人で申し込むことができる「Unlock & Revive(解放と再生)」は、認知症を含む脳関連疾患の患者を対象としたオンラインの社会的処方プログラムです。一方、「Programme 6(プログラム6)」は、最大8人の少人数グループに対し週1回の対面セッションを6週間にわたって行うプログラムです。参加は紹介制で、現在はエディンバラの大学コミュニティ限定で実施しています。

この事例研究では「Prescribe Culture on Campus(大学構内での文化的処方)」の活動と成果を紹介します。このプ

ログラムは、職員や学生に対してメンタルヘルス支援や治療的介入を行う「Prescribe Culture(文化的処方)」プログラムに対して付加的に行われているものであり、研究、教育と学習、カリキュラム改革、大学間連携、コンサルティングといった側面で国際的な取り組みも積極的に行っています。



「Prescribe Culture Programme 6(文化的処方プログラム6)」のセッションで行われた、石饜彫刻の様子 Photo © Hannah Ayre

今から400年以上前、学者・作家・聖職者のロバート・バートンが著書『憂鬱の解剖』(1621年)に「どれほど多くの学者が、知識を得るために世俗的な事柄や自分の健康を軽視してきたのだろうか」と記しましたが、2022年にもまさに、パンデミック後に生まれたさまざまな圧力が大学のコミュニティにのしかかり、多くの要望が寄せられました。構内のカウンセリング・サービスや障がい者支援サービスのスタッフやリソースに対する要請が、前年に比べて増加しました。「Prescribe Culture(文化的処方)」は、エディンバラ大学図書館および同大学所蔵品を活用する保護的な早期介入プログラムです。その内容に合致するニーズを抱える職員や学生にとって有益な紹介制のプログラムであり、健康とウェルビーイング、学生支援、人事といった大学内の各部署からの評価が次第に高まっています。

このプロジェクトを通じて効果的で種類豊富な「処方箋」を提供していくためには、学内の健康やウェルビーイングに関する支援サービスを担当する職員との緊密な協力関係に加え、エディンバラ各地のさまざまな文化遺産・文化関連組織との連携が欠かせません。

「T30TV(30分間オンラインで集まろう)」プログラムのキャッチフレーズは「文化遺産の世界で非日常を味わい、探検しながら、オンラインの社交を楽しもう」です。世界各地の文化遺産関係者の協力なしには実現不可能なプログラムであり、参加者は、さまざまな文化遺産への定期的な「訪問」を楽しむことができます。そのうち2箇所のみ挙げるとすれば、シドニー・リビング・ミュージアム(オーストラリア)やロベン島(南アフリカ)があります。

一方、より地域に根ざしたプログラムには、エディンバラ大学構内の美術館・博物館およびU-Create Studio(ユークリエイト・スタジオ)が提供している活動があり、また、今年の「Prescribe Culture Summer Programme 6(文化的処方の夏期プログラム6)」では、「Programme 6 @ The Botanic(植物園におけるプログラム6)」も行われました。ローラ・ギャラガー(コミュニティ・エンゲージメント部門責任者)が率いるボタニック・コテージ植物園のチームは、「Programme 6(プログラム6)」の研修に参加し、各回90分×6回の連続セッションを企画・運営することを快く受け入れ、熱烈に賛同してくれました。このセッションは、文化

“心が落ち着く体験ができ、
これまでになく気分転換や
リラクソスの効果がありました。
他の支援サービスに加えてこのプログラムを
利用するのも効果的だと思います”

「Programme 6(プログラム6)」への評価

遺産にまつわる物語を掘り起こし、自然のなかで過ごす経験がもたらす周知の効果を活用する内容でした。

「Programme 6(プログラム6)」の評価結果によると、「Prescribe Culture(文化的処方)プログラムは精神状態に良い影響を与える」、「精神疾患を抱える他の学生にも強く参加を勧めたい」、「価値の高い内容であり、あらゆる大学で提供できるようにすべきだ」、「今後のセルフケアの手段のひとつとして文化遺産との関わりを取り入れることに積極的になった」という項目すべてに対し、回答者全員が同意しています。

「Programme 6(プログラム6)」に参加する学生の多くは心の不調を抱えており、投薬治療と認知行動療法(Cognitive Behavior Therapy/CBT)のいずれかまたは両方、あるいはその他の対話療法を受けています。

「T30TV(30分間オンラインで集まろう)」のメンバーは、週に1度のオンラインでの文化遺産にまつわる物語との接点を通して、自分たちの手でオンライン上に、素晴らしい「安全な空間」を、あるいは自分たちの楽しみを、そして共通の考えを持つ人たちのコミュニティを築き上げているのです。T30TVの参加者からは下記のような感想が寄せられています。

“T30TVのセッションは、初めて参加した
ときから毎回とても楽しんでます。
温かく受け入れるような雰囲気で、
さまざまな年代の参加者と知り合い、
交流できることが楽しく、
日常とはかけ離れた時間を過ごせます。
本当に素晴らしいプログラムなので、
多くの人にT30TVのことを話しています!”

「Prescribe Culture(文化的処方)」プログラムは、エディンバラ大学の健康とウェルビーイングにまつわる連携団体から高い評価を受けています。同プログラム・リーダーは、エディンバラ未来研究所の学生メンタルヘルス研究グループに招聘され、スライブ・ネットワークの共同リーダーも務めており、2022年には大学健康協会の会議での講演を依頼されました。さらに昨年度は、医学部の大学1年生に向けて文化や文化遺産を活用した社会的処方についての指導を行い、これを来年度も継続するために、危機的公衆衛生の上級講師と緊密な連携を取っています。

「Prescribe Culture(文化的処方)」は国際的にも大きな影響をもたらしてきました。同プログラム・リーダーは、クイーンズ大学(カナダ)で教鞭を執る精神科医アン・ダフィー教授と協力関係を結んでおり、2020年には、人々のウェルビーイングを保護・管理する手法、またメンタルヘルスの非臨床的な処方として、文化遺産・文化・自然・運動が果たす役割についての授業を含む、学生向けメンタルヘルス・リテラシーのコースを共同で開発しました。現在は、「Prescribe Culture(文化的処方)」の「T30TV(30分間オンラインで集まろう)」をはじめとする、デジタル技術を活用したケア提供プログラムに取り組んでいます。また、同プログラム・リーダーはポルトガルにおいて、リスボン大学付属国立自然史・科学博物館およびノバ・リスボン大学でコンサルティングを行っています。いずれの組織も、学内や地域コミュニティへの「Prescribe Culture(文化的処方)」モデルの導入を準備しているのです。

今後の展開

「Prescribe Culture on Campus(大学構内での文化的処方)」が目指す次なるステップとしては、医療・社会福祉を専攻する学生向けに伝統的な健康支援施設での実習プログラムを開発すること、また、心理社会的な課題や精神疾患を抱える人々が文化遺産と関わることで得られる効果に関する確固たる根拠を積み上げるための、共同研究資金申請の最終調整を行うことが挙げられます。

所論

「はじめに」で指摘したとおり、本書で取り上げた事例研究は充実しているとはいえ、限定的な机上調査にとどまっております。心の不調を抱える人々に対するミュージアムの取り組みを広範に考察したというにはほど遠い内容です。そうしたなかでも、当財団が見定めることができたと感じているいくつかのパターンやテーマを以下に記します。

成功の鍵 地域のメンタルヘルス・パートナー

心の不調を抱える人々との関わりに特化した取り組みの実現において鍵となるのは、効果的な協力関係の構築です。なかでもよく知られる2つの方法としては、NHSやNHSメンタルヘルス・サービスを通じた取り組み、そして非営利団体、とりわけ慈善団体のマインド（イングランドおよびウェールズ）を通じた取り組みが挙げられます。

マインドと連携している組織は多数確認できており、ウオキングのザ・ライトボックス(p.44)やオックスフォードのアシュモLEAN博物館などがあります。また、マインド以外にも、メンタルヘルスの取り組みにおけるパートナーとなり得る組織はあり、例えば、スコットランド国立美術館は、アルコール依存症からの回復を目指す人々との取り組みにおいてローワン・アルバと連携しています(p.46)。

NHSと連携している組織は当然ながら膨大な数にのぼります。例えば、ビーニー美術館・図書館はケント・メドウェイ・パートナーシップNHSトラストと提携しており、ダリッジ・ピクチャー・ギャラリーはロンドン南部モーズリー NHS財団トラストおよび新規のテッサ・ジョーウェル・ヘルスセンターと連携しています。そのほか、ソールズベリー地区病院のアートケアのように、関連病院の慈善事業を活用している例もあります。また、リカバリー・カレッジとパートナーシップを結ぶケースもあり、その一例として、ダリッジ・ピクチャー・ギャラリーは地元のリカバリー・カレッジでアートクラスを実施しています。

明確に表明されていないものの、本書の事例研究から、これらの協力関係の多くがミュージアムの主導で成立したことが推察できます。

社会的処方とミュージアム

社会的処方をいち早く導入したいいくつかのミュージアムにおける成果について、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)が2014年から2017年にかけて詳しい研究を行いました³¹。この研究によれば、社会的処方の取り組みは、リンク・ワーカー(社会的つながりを支援する専門職)による万人に開かれたサービスや、イングランド芸術評議会の協力による社会的処方国立アカデミーやスライピング・コミュニティ基金の設立などが、イングランド政府の力強い後押しを受けて実現したものの、ミュージアムがこうした変革の先陣を切ってきたようには思われません。ダリッジ・ピクチャー・ギャラリー³²のように、心の不調を抱える人々を重点的に支援する非常に良い事例も確かにあるとはいえ、広く各地で行われているとはいえません。もうひとつの重要かつ特異な事例としては、エディンバラ大学の学生や地域の参加者を対象とした「Culture on Prescription(文化的処方)」構想が挙げられます(p.59参照)。

ミュージアムの種類

イングランドにはメンタルヘルスの問題に特化した専門的なミュージアムが複数あり、国際的な水準から見ても力強い存在感を示しています。本報告書ではそのうち3つの事例研究を取り上げました(p.14~22)。これまで多くの学術研究が精神医学の歴史に内在する深刻な問題を指摘しており、直近の例としては、アンドルー・スカルの著書『Desperate Remedies(絶望的な治療法)』³³があります。したがって、メンタルヘルスを専門とするミュージアムは、メンタルヘルスの支援サービスを受けたことがある当事者と関わる際、こうした側面を考慮しなくてはなりません。

そうした側面を別とすれば、本書では多様な事例研究を体系的に紹介しており、あらゆるミュージアムがこうした取り組みを実現できることを示しています。世界的に有名な

³¹ 「Museums on Prescription (ミュージアムの処方箋)」研究について詳しくはこのWebサイトを参照：
www.ucl.ac.uk/culture/projects/museums-on-prescription

³² 参照：www.dulwichpicturegallery.org.uk/learning/health-wellbeing/dulwich-picture-gallery-plus

³³ 「書評 アンドルー・スカル著『Desperate Remedies(絶望的な治療法)』—マインド・ゲーム」ガーディアン紙 2022年4月5日
入手先：www.theguardian.com/books/2022/apr/09/desperate-remedies-by-andrew-scully-review-mind-games

コレクションを誇るミュージアムの事例から、コミュニティに根ざした地域博物館の事例に至るまで取り上げているのです。

本書に掲載した事例研究のほかに、地域博物館で、閉鎖を予定している地元の精神科病院や精神病院に関する作品を、常設展あるいは期間限定の展覧会で紹介する事例もあり、メンタルヘルスに対する偏見や差別の解消を促すうえで重要な役割を果たしています。また、こうした動きと平行して、文化遺産の領域において、精神医療の記録を展示に活用することに対する関心が高まっており、そのような記録資料から着想を得た魅力的な参加型アートの例には、レストレーション・トラストの「Change Minds」プロジェクトがあります³⁴。

心の不調を抱える人々との取り組みを行うという選択肢は、すべてのミュージアムが持っているものであり、実現させるかどうかは、各館の姿勢と関心にかかっているのです。



「Together through Art (アートを通じてともに)」のワークショップ
Photo © Dulwich Picture Gallery

誰とエンゲージするか： 対象を定めたアプローチ

本書の事例研究は、メンタルヘルスに関するプロジェクトやプログラムを通じて特定の人々を支援することを目的とした、ミュージアムの多岐にわたる取り組みを紹介するものです。一部のミュージアムにおいては、地域のパートナー団体(多くの場合、慈善団体もしくはNHS)の協力を通して対象者に情報を伝えています。例えば、ビーニー美術館・図書館とダリッジ・ピクチャー・ギャラリーはどちらも、それぞれの地元のNHSトラストの協力のもとミュージアム主導のプロジェクトに参加することで、良い変化が期待できる地域のサービス利用者を選出しているのです。一方、地域特有のメンタルヘルスの課題に基づいた取り組みを行っているミュージアムもあります。例えば、スコットランド国立美術館ではアルコールに関する被害の当事者向けにプロジェクトを実施しており、また、マインド博物館のように、オンライン上のコミュニケーションを基軸として全国各地の対象者に手を差し伸べる取り組みを行っている事例もあります。さらには、地域のグループと協力して既存のプログラムを活用し、メンタルヘルスの問題に取り組んでいるミュージアムもあり、その一例としてリーズ美術館・博物館では、若者ボランティアと協力しています。

どのようにエンゲージするか

これらの事例研究で実施されている芸術表現は主に視覚芸術と創作文学ですが、その他のさまざまな側面には多様性がみられ、週1回の創作ワークショップやハンズオンの体験セッションが頻繁に行われています。多くの場合、フリーランスのアーティストがサポートしていますが、そのような業務を専門で行う役職への言及はほとんどありません。ホルバーン美術館の「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」プログラムでは2人のアーティストを専任で雇用していますが、多くのプロジェクトではラーニングとエンゲージメントの業務の一環として運営されているため、担当者はメンタルヘルスの専門家ではなく、さまざまなグループとの活動経験がある職員なのです。一方、フリーランスのアーティストのなかには、より専門的な知識を持つ人もいます。

また、本書の事例研究においては研修に関する論考が少ないですが、当財団では、さまざまなミュージアムにおいてこうした取り組みのための職員研修として、数多くの手法が確立されてきたことを把握しており、その例として、「メンタルヘルス・ファーストエイド・トレーニング(メンタルヘルス応急処置訓練)」やさまざまな心的外傷(トラウマ)に関する実践を活用した研修が挙げられます。また、もうひとつの重要な論点として、創作ワークショップなどの指導者の業務のうち、時に「感情労働」と呼ばれる側面に対してどの



かのアニメーションのネズミより遙か以前に遡る、1800年代末に作られたネズミ。作者不明の謎めいた姿で、廃材を使って簡素に作られており、幸せな気分をもたらしてくれる。かつては誰かの心を癒やす存在だったに違いない。レバンデル病院展覧会の解説文より 2018年

Photo © CSG CIC Glasgow Museums Collection

ようなサポートが用意されているかという問題があります。つまり、指導者の気持ちや感情に対する支援です。ソールズベリー博物館では、外部の臨床指導者がプロジェクト・チームをサポートする体制を取っており(p.49参照)、また、芸術家・研究者のニコラ・ネイスミスがこのテーマについて数多くの執筆活動を行っています³⁵。

一方、有給の研修プログラムを実施している非常に素晴らしい事例もあります。ダリッジ・ピクチャー・ギャラリーではクリエイティブ・ピア・ファシリテーターを採用しており、ファウンドリング美術館にも同様の役職があるのです。

展覧会はミュージアム活動の中核をなすものであり、ビーニー美術館・図書館の「A Place of Safety(安全な場所)」展やホルバーン美術館の「People Make Museums(人々が作る美術館)」展などの事例研究では、共同制作が果たす役割に着目しています。グラスゴー美術館の事例研究では、市民やコミュニティによるキュレーションが特に重要な論点となっています。同館の「Art Extraordinary(超アート)」プロジェクトでは、参加者を経験豊富な専門家とみなしてキュレーション技術を教える研修を行いました。そしてその成果として、ケルビングローブ美術館・博物館において、こうした手法でコミュニティがキュレーションした初めての常設展が開催されました。

“有給の研修プログラムを実施している非常に素晴らしい事例もあります。ダリッジ・ピクチャー・ギャラリーではクリエイティブ・ピア・ファシリテーターを採用しており、ファウンドリング美術館にも同様の役職があるのです”

リーズ美術館・博物館ではロックダウン中、若者ボランティア・グループ(プリザーバティブ・パーティー)が手がけた新しい展覧会が開催されました。一方、ホルバーン美術館はボランティア活動に加わるための段階的な道筋を用意しています。

プロジェクトでは、メンタルヘルスに関わる品々やテーマに特化することもあれば、定期開催の、もしくは進行中のあらゆる創作ワークショップや美術館訪問と同様に、他のいろいろなテーマを扱う場合もあります。本書の事例の多くは、このうち前者のメンタルヘルスに関わるものであり、そうした取り組みからおのずと得られる気づきを反映させています。

この報告書の作成時期からわかるとおり、掲載した事例研究で言及したプロジェクトの大半は、段階に差異はあれ、い

ずれもロックダウン下で実施されました。そのため、それ以前に行われた一般的な事例に比べると、デジタル技術を用いた参加形式がかなり多く採用されています。本書に取り上げたなかには、郵便を活用したミュージアムも数館あり、例えば、メンタルヘルス博物館はフードバンクを通じて2500個のウェルビーイングワークセットを配送し、ホルバーン美術館は580個のアートボックスを若者に配っています。一方、デンマークのオヴァルタシ博物館の事例からアイデアを得て、ベスレム・マインド博物館が実施したプロジェクト「Leaves of the Tree for the Healing of Nations (その木の葉は諸国の民の病を治す)」では、ロックダウンの経験にまつわるTwitter程度の短い文章を募集し、それをマスクに書き写して、まるで春の若葉のように木に飾りました。

どこでエンゲージするか

本書の事例研究の多くでは、活動の実施場所として、主にミュージアムや地域の会場が使われていますが、数は少ないものの病棟が使われている例もあります(なお前述のとおり、コロナウイルスによるロックダウンの影響で活動が中止になることもありました。また、エディンバラ大学の「Prescribe Culture(文化的処方)」プログラムではリモートやネットワーク上のプログラム提供に注力した結果、カナダやオーストラリアの機関との連携が生まれるなど、非常に国際的なプロジェクトへと発展しました)。

ダリッジ・ピクチャー・ギャラリーでは、地域住民向けのスタジオに多数の学生を招いて有給の研修生とペアを合わせ(p.30参照)、「Arts in Mind(心に芸術を)」の創作ワークショップでは、2009年以降、タウンナー・イーストボーン・ギャラリーを会場にしています(p.52参照)。

こうした事例とは対照的に、グラスゴー美術館・博物館が長年運営する有名なオープン・ミュージアムでは、ミュージアムに人を招くのではなく、コミュニティのもとへと作品を持ち込んでいます。この手法は、スコットランドの先駆的な芸術療法士ジョイス・レインがいわゆる「アウトサイダー・アート」を1000点以上集めた「Art Extraordinary(超アート)」コレクションの活用においても用いられました。地元の病院の患者を含む人々が共同でキュレーションし、ポロック・シビック・レルム(地域住民向け総合施設)、ケルビングローブ美術館・博物館、およびアート専門の慈善団体プロジェクト・アビリティでの展覧会へと結実させたのです(p.36参照)。

一方、タイン・アンド・ウィア州アーカイブ博物館(TWAM)は、依存症からの回復を目指す人々に向けた取り組みを長年行っているほか、セント・ニコラス精神科病院の2つの病棟で創作ワークショップを実施しています(p.56参照)。

ミュージアム文化の変革

本書掲載のすべての事例研究に共通しているのは、「ミュージアムは総じて私たちの健康にとって有益な場所になり得る」という認識です。これには、過去に言及されてきた研究や、キャミックとチャタージーの共著(2013年)³⁶において、すでに考察されてきた多くの要素が含まれています。本書で取り上げたミュージアムはいずれも、何らかの新しい要素を取り入れ、心の不調を抱える人々との関わりを促す方針を取っています。

“とりわけ興味深い疑問は、対象を限定したこうした取り組みが、メンタルヘルスの問題において、ミュージアム文化全体に変化を起す力となり得るかということです”

とりわけ興味深い疑問は、対象を限定したこうした取り組みが、メンタルヘルスの問題において、ミュージアム文化全体に変化を起す力となり得るかということです。こうした取り組みは、結果的にミュージアムのイメージに大きな利益をもたらすのでしょうか?これこそが、バースのホルバーン美術館で長年行われてきた「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」プロジェクトに対する独立的評価から得た結論でした(p.39参照)。

“当館では今後も、こうしたユニークな活動の場を提供していきたいと考えています。なぜなら、こうした取り組みが心の健康や回復をサポートし、社会的な孤立を減らす効果があることに加え、美術館への新たな意見をもたらし、多様な人々の来館を促すきっかけとなり、当館がさらに豊かな場所となることにつながるからです。それによって当館の文化や議論に変化が生まれ、ひいては美術館とは何か、どのような場所になり得るのかという論点に対する私たち自身の意見も変容していくのです。”

ルイーザ・キャンピオン (ホルバーン美術館、バース)

36 「公共衛生介入のパートナーとしての博物館と美術館」P・M・キャミック、H・J・チャタージー著 パースペクト・パブリック・ヘルス誌 2013年1月 133(1):66-71. doi: 10.1177/1757913912468523. PMID: 23308010.

結論：発展の余地

ミュージアムは、より民主的で包摂的な組織を目指して努力を重ね、その一環として、さまざまな手段でアクセスできる場所となるべく取り組んできました。そして、ミュージアムが人々の健康とウェルビーイングに寄与するという自らの役割にも大きな関心を示してきました。その一方で、心の不調を抱える人々に対する取り組みが実現しているかという、そのための協動的で一貫した努力は、認知症患者を対象とした取り組みと比べてごくわずかしが行われていません。その理由は定かではありませんが、認知症患者よりも心の不調に悩む人のほうがはるかに多いのは事実です。心の不調を抱える人々に向けた集中的な取り組みを行っても、短期的な資金援助やスタッフの情熱が長続きしないと、ほぼ間違いなく「プロジェクトタイティス(特定のプロジェクトへの過度な思い入れによる冷静な判断力の喪失といった負の影響)」に陥る傾向があります。すべての資

金提供者が、行き渡らせるのに十分な資金が集まらないことに苦勞しており、こうした状況からも、この領域において長期的な資金提供、基幹的な資源提供がいかに必要とされているかがわかります。

すべてのミュージアムは基本的に、「エイジ・フレンドリー(高齢者に優しい)」や「ファミリー・フレンドリー(家族連れに優しい)」といった定番の取り組みを行っており、「メンタルヘルス・アウェア(メンタルヘルスに理解がある)」あるいは「メンタルヘルス・フレンドリー(メンタルヘルスに配慮している)」といった定番の取り組みを行って、その実現には、職員や地域住民のメンタルヘルスをあらゆる側面から考慮しつつ、心の不調に悩み、そうした支援を求めている人々を対象を絞った取り組みを行うことが必要です。

認知症患者とミュージアム：対照的な側面

想定できる結果ながら、ミュージアム・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟が2016年に発表した『仮報告書』³⁷(p.10参照)によると、高齢者あるいは認知症患者向けのプロジェクトが最も多く行われており、今では、「ディメンシア・フレンドリー(認知症患者に優しい)」に配慮していないミュージアムを探すほうが難しい状況です。

ベアリング財団は2012年以降の5年間、大英博物館の主導のもと認知症患者に焦点を当てたエイジ・フレンドリー・ミュージアム・ネットワークを支援しました。物を通じて記憶を辿ることにある程度特化したミュージアムという組織が、記憶障がいなどの問題を抱える人々への支援に献身的に取り組む姿勢には、心打たれるものがあります。

認知症患者に向けた取り組みは至るところで行われている一方で、心の不調を抱える人々を対象を絞った取り組

みはなぜ非常に少ないのでしょうか？ そのひとつの答えは、「Meet Me at MoMA (MoMAで会おう)」³⁸のようなモデルとなる協動的な取り組みにあるかもしれません。これは、認知症患者を対象として2007年にニューヨーク近代美術館(MoMA)で始まったアクセスプログラムです。十分な計画と資金提供のもとで実施された活動で、その普及力により世界各地のミュージアムがこの活動から学び、追随しました。こうしたモデルを心の不調を抱える人々との取り組みにも適用すべきでしょうか？

その答えは定かではありませんが、過去10年間で目に見えて増加した病気としての認知症は、政治的にも文化的にも優先的な課題となっています。そして、そうした状況にも関わらず、精神医学³⁹や治療を専門とするミュージアムはイギリス国内に4館ある一方で、高齢者や認知症に特化したミュージアムはひとつもありません。

³⁷ 『健康とウェルビーイングに寄与するミュージアム 仮報告書』 ミュージアム・健康・ウェルビーイングに関する市民同盟 K・ラコイ、M・パツオウ、H・J・チャタージー他著 2016年 入手先：museumsandwellbeingalliance.wordpress.com

³⁸ 「Meet Me at MoMA (MOMAで会おう)」プロジェクトの歴史について詳しくはこのWebサイトを参照：www.moma.org/visit/accessibility/meetme/resources/#history

³⁹ メンタルヘルス専門の博物館にはほかに、ロンドンのフロイト博物館がある。

提言

01

ミュージアムに関心のある団体や社会基盤となる組織は、メンタルヘルスがまだ発展途上の重要な領域であることを明確に理解する必要があります。

02

この領域における取り組みを進展させていくうえで非常に重要なのは、スタッフと地域コミュニティの両者において、心の不調を抱える当事者の実体験やリーダーシップを尊重することです。

03

ミュージアムは、地域のNHSやマインドなどの非営利団体に積極的に働きかけ、協働の可能性を探るべきです。対象者を絞った支援について議論することも必要です。

04

少なくとも5月のメンタルヘルス啓発週間と10月10日の世界メンタルヘルスデーには、ミュージアムは関連する活動や展示を確実に実施できるよう準備するべきです。

05

特にラーニングとエンゲージメント担当職員を対象とした「メンタルヘルス・ファーストエイド・トレーニング(メンタルヘルス応急処置訓練)」や「トラウマ・インフォームド・プラクティス(心的外傷に関する実践)」などの研修の実施を、ミュージアムは検討すべきです。

06

ホルバーン美術館(バース)が実施しているようなメンタルヘルス領域に関する展示型イベントを増やし、良質な取り組みを共有して認知度を上げるべきです。オンライン指導ツールの拡充も必要です。

07

ニューヨーク近代美術館(MoMA)が認知症患者を対象に行っている取り組みのように、ミュージアムはこの領域の発展をリードしていくべきです。

08

ミュージアムへの資金提供者は、資金がメンタルヘルス分野に使われているかを明確に把握するか、もしくはこの分野に用途を絞った資金提供を行うべきです。可能な限り長期的な資金提供が求められます。

あしがき

クリス・スティーブンス ホルバーン美術館館長



2022年、ホルバーンのクリエイティブ・コミュニティ：「People Make Museums(人々が作る美術館)」展会場前のグループ参加者、アーティスト、ボランティア、美術館職員 写真提供：ホルバーン美術館

私は今から5年前に国立の美術館から独立型の地域博物館に移りました。当時は新しい発見が数多くありましたが、なかでも印象的だったのは、ホルバーン美術館におけるコミュニティ活動の重要性と影響力の大きさでした。当館は「アートを通じて人生を変える」というスローガンを掲げており、初めは単なる美辞麗句だと思いましたが、「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」プログラムの参加者と話すうちにその印象が変わりました。彼らが当館の活動に関わり、創造性を広げていくなかで、人生そのものがいかに根本的に好転したかを知ったのです。2003年に、隣接する市立公園に建つヴィクトリアン・ガーデナーズ・ロッジが当館の所有となり、資金調達を行ってシンプルな学習施設に改装しました。「Pathways to

Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」プログラムが生まれた最初のきっかけは、ここでのガーデナーズ・ロッジ・アート・グループの活動です。このグループは、当館入り口の階段で路上生活をしていた人々との取り組みから始まり、やがて心の不調を抱えた経験のある大人たちとの取り組みへと自然に発展していきました。そして複数のグループとのつながりが生まれ、他の組織との協力関係を結ぶうちに、「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」プログラムへと結実したのです。

“鑑賞者から関心が寄せられなければ、
展示品はただの生気のない物体に過ぎません。
誰かが興味を抱き、
その人の知識や感情、
人生経験を投影することで、
その展示品は唯一無二の方法で
命を得るのです”

私は、このプロジェクトが当館提供の慈善事業ではなく、関係者が利益を交換する仕組みであることを知り、驚きました。プログラムの基盤は、参加者が当館及び当館所蔵品と関わり、その結果として創作活動を行うことであり、そのような関わりを通して、当館自体が生命力を得ます。というのも、鑑賞者から関心が寄せられなければ、展示品はただの生気のない物体に過ぎません。誰かが興味を抱き、その人の知識や感情、人生経験を投影することで、その展示品は唯一無二の方法で命を得るのです。このようにして、誰もが皆、ひとつひとつの出会いから新しく学びます。そして、こうしたプログラムの参加者は、小規模なミュージアムであれば職員や役員や仕事仲間と同様に、家族のような近い存在となり、そうした関係性は、ミュージアムが自らを知るうえで大きな影響を与えます。このため当館では事業の根幹に「Pathways to Wellbeing(ウェルビーイングへの道)」の精神を据え、あらゆる活動に刺激や影響をもたらす試金石として、当館は他者に手を差し伸べる場所であるという指針を採用しています。

私は本書のおかげで類似のプログラムを行う他館の事例を知ることができ、非常に感動しました。「ミュージアム」という言葉の新たな定義についての議論が進むなか、「ミュージアムは人々の健康と前向きな交流のための場である」という考え方が徐々に広く浸透してきました。とはいえ、この点に関してミュージアム業界が直面している最大の課題のひとつは、ミュージアムのなかでこうした取り組みの重要性が増しているにも関わらず、外部からはいまだに付随的な活動のように思われていることです。社会的・精神的な健康支援のエコシステムの一部として認識されているにも関わらず、資金提供は依然として短期的なものにとどまっているのです。こうしたプログラムが発展するにつれ、関係した人々や組織は学びや成長を経て豊かになるものの、非常に多くのものが失われ、そうでなくとも十分に活用されていません。短期的な資金提供に頼りながら綱渡り的に進んできたためです。さらには、資金提供が更新もしくは延長されたとしても、資金提供者は新規の取り組みや新たな成果や支援対象者を好む傾向にあります。ミュージアムの役割が変化するなかで、従来の所蔵品の収蔵庫としての役割に対する主要な資金提供は減少する一方のように見受けられ、社会的な交流や支援の場としての役割に対する資金提供は相変わらず短期的なものにとどまっています。芸術・創造性・文化的な活動が健康にもたらす効果を促進する国家的な社会的処方構想を含め、当館が過去数年かけて開発してきた潜在的な力を十分に発揮するためには、ミュージアム業界の資金提供の基盤を安定的で長期的なものへと変化させる必要があることは確かです。そうすることで、ミュージアムが個人やコミュニティに与える恩恵を大きく膨らませることができるのです。

芸術とメンタルヘルスに関する ベアリング財団の出版物

いずれも下記の公式サイトからご覧いただけます。 www.baringfoundation.org.uk



クリエイティブ思考
デイビッド・カトラー 著



クリエイティブ思考と若者
ハリエット・ルーヴェ 著



クリエイティブ思考と
民族多様性
ベアリング財団 編



クリエイティブ思考とNHS
デイビッド・カトラー 著



クリエイティブ思考と文化遺産
レストレーション・トラスト 著



クリエイティブ思考要覧
ベアリング財団 著



重度精神疾患患者のための
芸術と創造性

ハンナ・ザイリツヒ、
コリーナ・ハックマン、
ジュリアン・ウエスト、
メラニー・ハンドリー、
ジャスミン・プラント 著

デイビッド・カトラー 著

『ミュージアムにおけるクリエイティブ思考

心の健康に寄与するクリエイティブなミュージアム活動』

〈日本語版〉

著者:

デイビッド・カトラー

日本語版監修:

国立アトリサーチセンター (NCAR)

企画・編集:

稲庭 彩和子 (NCAR)

金井学 (東京藝術大学)

邱君妮 (東京藝術大学)

発行日:

2023年10月8日

発行:

独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-13-12 北の丸スクエア2階

TEL: 03-6910-0244 (代表) FAX: 03-6910-0756

URL: <https://ncar.artmuseums.go.jp/>

※この日本語版の発行はJST 共創の場形成支援プログラム

『『共生社会』をつくるアートコミュニケーション共創拠点』

(JPMJPF 2105)の支援を受けています。

<https://kyoso.geidai.ac.jp/>

印刷・製本:

日本印刷株式会社

The Baring Foundation

Creatively Minded at the Museum:

Creative and Mental Health Activity in Museums

By David Cutler

Originally published by Baring Foundation

URL: <https://baringfoundation.org.uk/>

